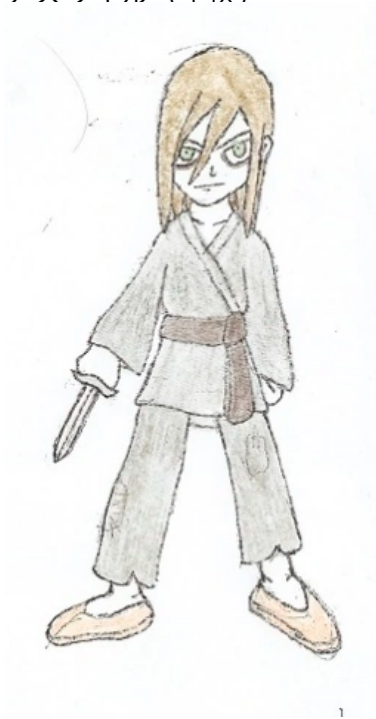


付録：キャラクターイラスト

アズライル (子供)



アズライル (大人)



サリール (子供)



サリール (大人)



幽霊猫



エティオス



ゴルゴ



クルゴス



ラスニス



パラマス



コライス



ヴァルラーミ



カナヴォス



グロス



エレレフス



プロローグ

創造の前には、唯一無二の光である神エリウンだけが存在していました。そしてエリウンではないものはすべて闇でした。しかし、闇は封印されていました。光の中で現れることはできなかったからです。エリウンはその光を引っ込め、古代の世界パラディソスを創りました。そして天使たちがその地で目覚めました。

そして天使たちはアダマス王子を選び、神はアダマスに創造の礎であるアストラルの王冠を託しました。しかし、闇は天使エレフスの心に現れ、彼は王冠を奪い、「神の天使たちの上に自分の玉座を築き、エリウンに似る存在になる」と言いました。こうして創造は呪われ、エレフスは悪魔である、邪悪の原因となりました。自分の女性的な側と一体化するという欲望にとらわれたアダマスは、人間を生み出し、彼らはパラディソスで増えました。そしてエレフスは人間に秘密の道を教え、それは何ももたらさない道でしたが、人間たちは彼を崇拜しました。

それは牡牛座の時代、大地の時代でした。この時代の終わりに、反逆の魔術師ウリイルは啓蒙の木を見つけ、それを食べて大洪水を引き起こしました。そして洪水がパラディソスを飲み込み、水が引いた後に新しい世界、イクミニが現れました。アダマスの子孫だけがアダマスの子らの中から生き残りました。しかし、エレフスは肉体を持たない存在であり、洪水が過ぎ去った後にその体を再生し、人間たちについてイクミニまでやってきて、アッシュールの地においてヴァヴェルという宮廷を築きました。

そして牡羊座の時代が過ぎ、火の時代、牡羊座の時代が来ました。この時代の中に、人間たちの共通言語が変わり、パラディソスの言語であるアダメオは秘術の言語となりました。

そして牡羊座の時代も過ぎ、魚座の時代、水の時代が来ました。この時代に神の光の化身であるイフティスはロジアを創設し、人間たちに神秘的な道を教えました。これに怒ったエレフスはイフティスを闇に捧げるために十字架にかけました。イフティスの使徒たちは彼の霊に導かれ、立ち上がり、エレフスに勝利しました。彼らはダートの鏡を使って彼の霊を物質界から分離させました。その過程で、アストラルの王冠は月の冠と太陽のティアラに分かれ、それによってアデプトたち、つまり使徒たちはアルコンテとハイロファントとなり、ルメリの地にビザンティオンを建国しました。しかし、エレフスの影、彼の暗い霊は人間たちの心に影響を与え続けました...

第一部 「第一章 「墮落

夜が訪れ、秋の初めの夜だった。エデッサという国境の街をさまよい歩く、やせた青白い少年アズライルは夢にふけていた。彼は十三歳だが、見た目は十歳にも見えなかった。肩まで届く黒髪があり、彼の灰緑色の大きな目と柔らかい顔立ちは、頬のくまが全くなければとてもかわいらしい子供になったであろう。彼は灰色の褻褌な服を着ていた。孤児であるため、他の服は持っていなかった。彼は双子の兄サリールと共に街の外れにある家に住んでいた。2年前、フランガ人が都市を次々に征服してくると、彼らの両親は彼らを見捨てて逃げ去ってしまった。この結末は

双子には驚きではなかった。彼らは自分たちが存在に縛り付けられていることに、いつも理解されず愛されず感じていたのだから。

突然、背後から猫の鳴き声が聞こえた。いつも猫と親しみを感じていたアズライルは夢から覚め、頭を振った。神秘的な斑点を除いて真っ白な、霊的な猫が彼を闇からじっと見つめていた。その猫の目は月の光のように薄く灰色だった。アズライルは自分の意識がその猫の意識とテレパシーで繋がっていると感じ、何か家でおかしいことが起こっていることを知った。

アズライルはエデッサの街の通りを駆け抜けて自宅にたどり着いた。その家はぼろぼろの2階建て建物だった。ドアは半開きだった。

家の中は何も異常がなさそうだった。ランプの明かりがついており、アズライルが夕食のために「借りた」パンがまだテーブルに残っていた。

しかし、不思議な雰囲気漂っていた。アズライルはベルトに付けていた小さな短剣を取り出し、忍び足で進んだ。廊下の奥、双子が寝ている部屋の入り口の前に、なんとなく奇妙な存在を感じた。

アズライルの存在をすぐ感じ取った見知らぬ人物は、彼の方を向き、闇から姿を現した。彼は髭のない、赤みのある茶髪で、黒い服を着ていた。左手にはアズライルが熟知している本である魔法書を握りしめ、右手には首に向かって曲がった剣を持ち、サリールの首に突きつけて脅していた。その邪悪な人物はアズライルに陰険な笑みを向けた。

「私はエティオスといいます。アーコンテ・ヴァルラミの異端狩り者です。魔法書の使用は...ある痕跡を残し、法律違反です。つまり、私はあなたたちに何をしても構わないのです。自分のために、ナイフを投げ捨てなさい」とエティオスは言った。

「羊のように殺される気はありません、ありがとう」とアズライルは冷たく返答した。

殺し屋は興味深げに少年を見つめた。

「度胸があるね、お前は...お前と共有された知性がちゃんとある。それが気に入った。だからお前に自分の能力を示す機会を与えてやる」とエティオスは剣をしまい、魔法書をしまってアズライルに向かって手招きした。「さあ、おぼっちゃん、私を殺してみる。もし成功すれば、解放してやる。成功しなければ...」

エティオスは脅威を漂わせる言葉を空中に浮かべたままにした。

アズライルはエティオスが自分と遊んでいることを知っていたが、また、彼が首に刺し傷を与えると血を流し、他の人間と同じように死ぬことを知っていた。エティオスは力や体格、経験でアズライルに勝っていたとしても、彼を刺すことができる。躊躇することなく、アズライルはエティオスに向かって走り出し、偽動作をし、刺突を試みたが、エティオスは最後の

瞬間にアズライルの手首を掴み、もう一方の手で彼の首をつかみ、壁に押しつけて息をつかせないようにした。

「お前は弱い」とエティオスは嫌悪の念をこめてつぶやいた。「知っているか？お前が弱い理由は何か？お前には憎しみが足りないからだ。だから、お前を憎むことを学ぶ場所に連れていく。人間性を失い、道に立ちふさがる者を冷酷に殺せるようになったとき、私はお前を探し出し、私たちの決闘を終わらせるだろう。そして、今、ナイフを手放すか、手首を折るか、どちらかを選べ」

躊躇しながらも、アズライルはナイフを落とした。彼は自分の壊れやすい双子をエティオスが連れて行く場所で守らなければならないことを直感的に感じ取っていたが、手首が折れてはそれが難しいだろう。

殺し屋は双子を孤児院の門まで連れて行った。赤く鼻が充血していて、栗色の髪を髷でまとめた頑丈な女性が彼らを出迎えた。彼女はウイスキーの匂いが漂っており、手にはオークの棒があった。

「これらの子供たちを連れてきた。さようなら」とエティオスと言った。

返事を待たずに、異端狩り者は立ち去り、闇に消えた。

女性はアズライルとサリールを上から下まで見つめた。

「お前たちは瓜二つだな。まったく、これまでに瓜二つの子供を連れてこられたことはなかったよ。私はゴルゴ、この迷子の子供たちのための保護者だ。お前たちの名前は何だ？急いで、小さな悪党たちよ」

「アズライル...私の兄弟の名前はサリール」とアズライルは言った。

「ああ、サリールに何かあるのか？彼は物静かなのかね？」ゴルゴは嘲笑した。

「彼は...内気です」とアズライルは外交的に答えた。

「内気？なぜお前は内気ではないのか？お前たちは双子だ

ろう？お前の『内気な』弟がちゃんと答えるまで、このクソガキめ、私がどんな手を使おうと関係ないぞ！」ゴルゴは脅迫的にサリールに向かって棒を振り上げた。「最後のチャンスだ、甘ちゃん、お前の名前を言え！お前の顔を打ち砕いてやる。どうでもいい！」

サリールは恐怖で身動きが取れなかった。ゴルゴは棒を振り下ろしたが、アズライルは立ち塞がり、それを止めて、空中で掴み留めた（ゴルゴは彼よりもずっと強かったため、アズライルは両手を使わなければならなかった）。怒りで赤らんだ顔のゴルゴはアズライルをつかんでシャツを引っ張り、ほとんど窒息させるほど絞めた。彼女の酔っ払った目は、発狂した犬のように血走っていた。

「サ-サリール」と小さな声がした。「私の名前はサリールです。兄弟を殺さないでください...」

アズライルは放され、めまいがした。アズライルが倒れないように、サリールが彼を支えた。

保護者は腕を組んで立っていた。

「殺すつもりはなかった。子供嫌いだけど、仕事嫌いの方がもっと嫌いだし、国は私に殺された孤児の代わりに生き残った孤児を払ってくれるんだ。とにかく、お前たちはしっかりしろ。お前たちの仲間がお前たちを食い尽くすぞ。お前に関しては、お前が再び私に挑むようなことがあれば、血を流すまでむち打つぞ。はっきりしたか？」

「はっきりしてます」とアズライルは冷たく答えた。

ゴルゴは携帯酒瓶を取り出し、一口飲み、げっぷをした。

「中へ入れ」

双子は孤児院の中に入った。するとゴルゴは鍵をかけた。

「寝室は上の階だ。左側の最初の部屋だ。ベッドは共有しなければならないから、空いているのは一つだけだ。出て行け」

ゴルゴは相当な努力をして、比較的酔っていない日を過ごすためには、一日の仕事を終えてから自由に酔いたいと思っていた。双子が階段を上っていくと、彼女はキッチンに行き、ウイスキーのボトルが詰まった戸棚を開けた。両手に一本ずつ持ってリビングルームに行き、ソファに寝転がって飲み始めた。

「お前には報われる日が来たね、ゴルゴ。辛い一日だった。明日からはまた、このクソガキたちを相手にしなければならない」と彼女は自分に言い聞かせた。

第II章 「捕囚」

数週間が過ぎ、毎日が同じような日々であった。朝、ゴルゴは孤児たちを叫び声で起こし、パンとコップ一杯の水を朝食として与えた。30分後、彼女は生徒たちを鉄格子の窓のある教室に6時間詰め込んで、繰り返し語句やスローガンを暗記させた。この洗脳の目的は、「あなたがたを真の男性、労働者、国家に仕える兵士にすること」だった。さらに悪化させるために、ゴルゴは常に集中を要求し、一人でも気を散らす生徒には肩を叩いて厳しく注意した。午後には、薄っぺらなキャベツのスープという貧弱な食事の後、ゴルゴは生徒たちを庭に出し、自分のフラスコを補充し、夜ご飯の残り物を夕食として提供した後は、酒を飲みながら眠るまでを数えた。

1ヶ月半後、サリールは孤児院に入って最初の日から熟考していた決断を下した。

双子は本来内向的で個人主義的な性格だった。彼らは共に自由と孤独の不足を感じていたが、アズライルよりも感受性が強いサリールは、ゴルゴの棒が彼の体だけでなく魂にも傷を負わせるとき、涙を流すことを避けることができなかった。アズライルはゴルゴからサリールを守ることができず、同じくゴルゴの暴力に耐える「男らしい」いくつかのばかげたガキどもがサリールを嘲笑い、苦しめることを阻止することもできなかった。

これ以上は耐えられなかった。また、アズライルにとってもサリールにとっても、二人とも冬を越えることはできなかった。冬、白い死、結核が憂鬱な精神を持つ細身の子供たちを連れ去っていった。

サリールは慎重にサリールを起こさないように気をつけながら、ベッドから抜け出し、最小限の音を立てずに寝室を出た。影のように静かに、階段を下り、台所に向かった。いくつかの引き出しを注意深く開けると、彼は探していたものを見つけた。ゴルゴが食べる肉を切るために使っているナイフで、孤児たちに使用することを禁じていたものだ。

サリールは床に座り、窓から差し込む月の光が最後に自分の顔を照らすのを許した。数メートル先のリビングルームから、ゴルゴのいびきのエコーが聞こえてきた。サリールは苦い笑顔を浮かべた：もうすぐそれらの音は聞こえなくなるだろう。彼は自分の首の脈を探るように触り、ナイフをしっかりと入れて深い傷を開けた。血が噴水のように湧き出し、彼の服を浸し、床に水たまりを作った。数秒後、少年は意識を失い、微笑んだ。

「これからは、私たちは自由になる。さようなら、兄弟よ」。

その瞬間、月明かりの光の中から、灰色の目を持つ青白い肉のスペクトル的な白猫が現れ、サリールに近づいて歩いてきた...

夜明け前、恐怖の叫び声が孤児院中に響いた。アズライルはすぐに目を覚まし、サリールの不在に気付いた。何が起こったかを察知し、彼はベッドから飛び起き、叫び声の発生した場所に向かって走った。騒ぎに触発された他の少年たちはアズライルに続いて階段を下り、キッチンまで行った。

ゴルゴは立ち尽くし、血だらけの死体を見つめていた。乾いた血のカケラが彼女の服と床の一部を覆っていた。彼女の手には、自分の首を切ったナイフが握られていた。痛みに狂ったアズライルは、ばかげたようにサリールを揺さぶろうと試みたが、「目覚める」ことを願って彼の体に触れただけで、彼の体は崩れ去り、床にはからっぽの服だけが残った。

「おい、みんな、この変わり者の肉塊は乾燥して粉々になっているぞ！」と、茶色い髪のガッチリとした体格のクルゴスが言った。アズライルはナイフを手に取り、クルゴスに殺意のこもった視線を向けた。

「俺の兄弟をもう一度馬鹿にしたら...」

ゴルゴはうとうと目を覚まし、和解的な態度で割り込んだ。

「まあ、アズライル、そう怒るなよ。ナイフを置いて、いい子になりなさい」と彼女は偽善的な親切さをもって言ったが、アズライルを欺くことはできなかった。心の底では、ゴルゴは、自分が双子を受け入れるために得たものよりも費やすべき金額が多い葬儀を払わなくて済むことに満足していた。

アズライルは選択肢を考えた。ゴルゴを刺し殺してから他の子供たちに襲いかかることもできたが、彼らは9人であり、合理的な考えを持つ彼はそれら全員を殺すことは不可能だと知っていた。彼らは彼の武器を奪い、リンチするか、逃げ出して警察に通報するだろう、国家の番犬たちだ。

さらに、孤児院で過ごした時間の中で、誰にも気づかれずに建物を探検し、興味深いものを発見していた。今日の夜、サリールと話すつもりだった。

ゆっくりと、アズライルはナイフをカウンターに置き、ゴルゴは慌ててそれを取り上げ、彼から遠ざけた。

「さあ、見ているな！リビングルームに行って、私は掃除をしないといけないし、授業を始める前に朝食を用意しないといけないんだ！」とゴルゴは急いで言った。

アズライルはサリールの姿の残骸を最後に一度見つめた後、仲間に従って行動した。彼が死体に触れたとき、アズライルはテレパシー的なメッセージ、自殺の

ようなメモのようなものを彼の心の中で聞いた。

「兄弟、ありがとう。私には足りなかった決断力を与えてくれてありがとう」とアズライルは思った。「君に失敗したけれど、私は誓う、今夜、君の死を報い、自分の鎖を破る」。

第三章 「脱出

兄弟が前の夜にしたように、アズライルは寝ている他の全員を無視して、寝室を出て階段を下りた。ゴルゴのいびきを無視しながら、アズライルはリビングルーム、キッチン、バスルームを通り過ぎ、二度と開けてはいけないドアに到着した。孤児たちはそのドアを開けることを禁じられていた。ドアの向こうには、狼のように暗い通路があった。アズライルは中に入り、注意しながらドアを背後に閉めた。いびきが聞こえなくなったとき、アズライルは微笑んだ。

数秒間まばたきをした後、アズライルの目は暗闇に慣れた。彼は好きな猫のような夜間視力を持ってはいなかったが、彼の目はほかの人間の多くよりも鋭かった。

ためらうことなく、アズライルは階段を下り、いくつかの曲がり角を曲がり、常に施錠された鋼鉄の二重扉に到着した。見た目では、裏口の扉はメインの木製の玄関よりもずっと手ごわい障壁だったが、アズライルは数日前にそれを調べたときに、製作者が見落とした何かがあることに気づいた。おそらく、外から見えるように頑丈な扉ではないのかもしれない。それはただの可能性に過ぎなかったが、試すしかなかった。

アズライルは一步踏み出し、右手のかかとで錠前を叩いた。金属音が鳴り響き、鋼鉄の扉が開いて、放置された草むらと雑草だらけの庭に入る道を開いた。

アズライルは微笑みを浮かべながら外に出て、予想どおり、錠前がはずれた後は扉を閉めることはできなかったことを確認した。これはつまり、このトリックは一度しか使えないことを意味していた。

アズライルは注意しながら庭を横切り、2メートル以上ある鉄柵を乗り越え、尖った槍の列で終わるところで飛び降り、膝を曲げて道路に着地した。

静かで静かなエデッサの街の通りを、アズライルはできるだけ静かに急いで進んだ。近くに警察の巡回隊がいると感じたときには、影に隠れるようにしていた。ついに目的地に到着した。それは、リングで命を賭けて生活している剣士であるラスニスという男の家だった。息を止めて、少年は建物の正面にある狭い窓から潜り込み、家の中に入った。壁には、彼が探していたものがあった。ラスニスの剣が台座に掛けられていた。

アズライルは剣を抜き出して刃を見入り、しなやかで両刃の刃を称賛した。いくつかの斬撃と刺突を試し、それが軽くて素早く、バランスが取れており、彼の目的には理想的な武器であることを確認した。満足したアズライルは剣を鞘に収め、窓から外を見て、巡回隊が通らないことを確認した後、剣を手に街に飛び出した。

アズライルの足が再び孤児院の庭に触れると、彼は事前に柵の隙間を通していた剣を拾い上げ、急いで通路のドアに向かった。彼は慎重に開け、一部だけ開けて、ゴルゴがまだ寝ていて豚のようにはびきをかいていることを確認するために耳を澄ませた。少年は中に入り、ドアを背に閉め、ゆっくりと剣を抜き、リビングルームに向かい、ゴルゴが寝ているソファの正面に立ち止まった。女性の太い首は息遣いに合わせて膨らみ、アズライルは剣を上げた。真実の時がやってきた。彼の兄弟は自分の命を絶つ勇気を持っていた。彼は自分の敵を報復するために自分の敵を絶つ勇気があるだろうか、たとえそれが無防備で眠っている間に彼らを殺すことを意味するとしても？ゴル

ゴは死を当然の結果として受けるに値するかもしれないが、それでも冷酷な方法で人を殺すことは名誉ではない。彼は誰にも害を与えずに逃げる選択肢がまだあった。

サリールの声が再び少年の頭の中で響いた。「これからは、私たちは自由になります。さようなら、兄弟」。

アズライルは自分の誓いを思い出し、躊躇することなく彼の迷いを葬り去り、ゴルゴの喉に鋭い刃を滑らせた。肌、脂肪、筋肉をバターのように切り裂いた。すぐに、女性は目を開けてアズライルを恐怖と憎しみの混ざった表情で見つめた。叫ぼうとしたが、彼女の体内に出血している血が肺を満たし、声を奪った。わずか10秒も経たないうちに、彼女の酔っ払った眼は消え、体は動かなくなった。ゴルゴ、アルコール中毒で虐待的な女性、彼女は死んだ。

ショックを受けたアズライルは、剣から滴る血を見つめた。この殺人の行為によって何かが彼の内部で変わったことを感じていた。彼の記憶がアエティオスの声を思い起こした。「お前は弱い。なぜ弱いか知っているか？お前には憎しみが足りないからだ。お前が人間性を失い、冷酷に道に立ちはだかる者を冷血に殺せるようになるとき、私はお前を探し出して私たちの決闘を終わらせるだろう...」

アズライルは辛辣に笑い、彼の敵が望んでいたことを正確にやったことの皮肉さを非難した。憎しみがすべての道徳的な迷いを飲み込んだとき、冷酷に殺すことができ、人間性を失った。それでも、彼は後悔していなかった。彼がすべきことをやったのだ。

ためらいもなく、アズライルは剣から血を振り払い、階段を上がり、寝室のドアを慎

重に開けた。9人の少年たちの呼吸は深く、規則的になっており、彼らが深い眠りについていることを示していた。

微笑みを浮かべながら、アズライルは最も近くのベッドに近づき、眠っている少年の首を切り裂いた。ゴルゴと同じように。

彼がまだ息を引き取っている間に、アズライルは影のように次のベッドに移動し、同じ行為を繰り返しました。8人目の首を切ったとき、後ろから抑えられた叫び声が聞こえた。アズライルはすぐに振り返り、一歩踏み込み、鋭い刃をクルゴスの気管に押し当てた。

「お願い、お兄ちゃん！」と泣きながら、いじめっ子のクルゴスは訴えた。「僕を殺さないで、お兄ちゃん。僕は変な奴に冗談を言ったり、腕をつねったりしたけど、ゴルゴの暴力を受けていたのはゴルゴだけだった...」

アズライルは声を遮り、冷たい怒りに満ちた声で言った。「お前たち全員が、兄と同じく泣いている時に皆が笑っていた。お前たち全員が彼を脅かし、彼を苦しめるのを手伝った。だから、お前たちはゴルゴと同じくらい罪深いし、彼女と同じ運命を共有する価値がある。さようなら」

アズライルは剣を突き刺し、手首を回転させて抜いた。いじめっ子は地面に倒れ、死んだ。

しばらくの間、復讐の欲求が満たされたアズライルは、剣から血を振り払い、鞘にしまった。すぐにめまいがして、倒れないように壁に寄りかかった。彼は疲れきっていた。長くはここにいられないこと、できるだけ早く逃げなければならないことを知っていたが、もし今すぐに寝ないとすぐに意識を失ってしまうだろう。ふらふらしながら、彼は横になり、たった1分も

経たずに意識を失った...

第四章 パートナー

「立派な肉屋を開業したんだね」

アズライルはラスニス声をすぐに認識し、彼の言葉で目を覚まされ、ベッドから跳び起きました。アズライルは緊張した状態で、剣を抜いていました。ラスニスは美しい蒼白の男で、黒髪と灰色の目をしていました。

「落ち着いて、少年。私はただ...」

攻撃側に立つと有利だと知っていたアズライルは、ラスニスに向かって命を奪おうと躍り出ました。しかし、ダンサーのような優雅さで、ラスニスはアズライルの突撃をかわし、彼の剣を奪いました。アズライルは、自分には一度たりとも勝つ術がなかったことを悟りました。それはエティオスと同じだった。

「私を殺してくれ」、子供は無力感に涙を流しながら懇願しました。「死ぬことは恐れない、しかし、野蛮な人々に支配され、鳥かごの中で一生を送ることだけは怖いんだ」。

「誰が誰の人生を台無しにする権利があるだろう？」とラスニスは答えました。「君を訴えるつもりなら、起きたときに話し合いができなかっただろう。私は君が残した死体を見た後、こっそりと出て行って警察に知らせることもできた。君がやったことには何らかの理由があると思うし、いずれにせよ私には関係のないことだ。今、私は剣を取り戻したから、自由に進むことができる」。

「進む道？何の道だ？」とアズライルは苦しみに満ちた声で言いました。「国にとって私は犯罪者であり、武器もなければ追放された者としてのチャンスもない」。

「もし行く場所がないのなら」とラスニスは優しく言いました。「私の家で暮らして、私の技を学ぶことができる。君は剣の才能を持っているように見える」。

「なぜ私を教えようとするのか？何の利益があるんだ？」とアズライルは疑念を抱きました。

ラスニスは迷いました。

「それを話したら、おそらく君を殺さなければならなくなるだろう」。

アズライルは肩をすくめました。

「私は死ぬことは気にしない」。

「わかった。カナヴォス、真の指導者が石になった後、2人の剣士が宦官として育てられた者たちが、反乱の火をつけるために、女王代理とその番犬であるグロスを殺す陰謀を企てました。彼らの名前はナルシスとエティオスです」。

アズライルは自身の苦境の原因となった人物の名前を聞いて、怒りに燃えました。

「...ナルシスがグロスと戦っている間に」とラスニスは続けました。「エティオスはヴィザンチオンの王宮でヴァルラミに対処するはずでした。しかし、エティオスはナルシスを裏切り、女王代理に忠誠を誓い、異端狩りの狩人として仕えることを申し出ました。ナルシスはヴィザンチオンから逃げ出し、偽名の下で生き延びていました」。

アズライルはにやりと微笑みました。

「わかりました。私はナルシス、あなたの寛大な申し出を断る理由はありません。私もまたエティオスと未解決の問題を抱えていますし、私もまた専制君主は死に値すると考えています。あなたの技を教えてください、そして私はあなたを助けます。ただし、あなたのしもべになるつもりはありません。冷血に殺すために身を低くしたのは、自由になるためであり、他の鎖を変えるためではありません」。

宦官は少年の髪をなでました。

「それは気にする必要はありません。私たちはパートナーであり、仲間です。共通の目的で結ばれた仲間です。階級はありません。ただし、私の本当の名前で呼ばないでください。誰が聞いているかわかりませんから...」

ラスニスは中断し、窓の外を見ました。

「もうすぐ日が昇ります。この暗闇の最後の数分間を利用して、この場所を焼き尽くして逃げましょう。警察が来る前に、焼け焦げた瓦礫がここで起こった秘密を守ってくれるでしょう」。

アズライルは邪悪に微笑みました。ゴルゴが長年蓄えていた蒸留酒がたくさんあるので、適切な場所でランプを壊すだけで、孤児院を地獄に変えることができるのです。

第五章 「復活

サリールは目を開けた。彼はベッドの上に横たわり、優しく彼を見つめる老人のそばにいました。老人は亜麻のチュニックを着ており、銀色の円盤がある紫の亜麻の帽子、太陽のティアラを頭に被っていました。

老人は胸に手を当て、聖なるオーラと知恵が彼を光の輪で包みました。

「自己紹介をさせてください。私はパラマス、ヴィザンチオン寺院の聖職者です」

「寺院はもう存在しません」とサリールは冷たく答えました。「それはフランゴスたちによって破壊されました...」

「私も知っています。これはただの反映、ダートの鏡の内部で魔法によって作られたレプリカです」

「なぜ私がここにいるのですか？」

「それは謎です。数時間前、鏡の部屋で異変を感じ、あなたを裸で気を失っているところを見つけました。それでチュニックを着せ、私のベッドに連れてきました」

サリールは自分が孤児の衣服ではなく、老人と似たチュニックを着ていることに気づきました。また、首には切り傷の痕跡さえありませんでした。

「私が見つかったとき、何か傷はありましたか？」

「いいえ」

少年はしばらく黙って考えました。

「喉を潤す必要がないのは奇妙ですね」と彼は言いました。「気絶する前に多くの血を失いました」

「それについては説明できます」とパラマスは言いました。「鏡の内部は霊的な領域に属しません。ここにいる間は、物質の領域で私たちの体を苦しめる必要はありません」

「何もかもが意味をなさない」とサリールは考えました。「私は喉を切ったこと、死にかけたことを覚えている...」

その時、彼は幽霊の猫を思い出しました。月の光から現れた白い猫で、不思議な生き物は致命傷を癒し、サリールを鏡の内部にテレポートさせ、血まみれの服をそこに残したに違いありません。

「もし私が話を聞いてもらえば、その謎を解明するのに役立つかもしれません」とパラマスは彼の考えを察しました。

彼の不運な人生の記録がサリールの口から流れ出し、彼の首から流れ出した血のように流れました。パラマスは黙って、辛抱強く聞き、深い同情を持って彼を見つめました。話が終わると、少年は疲れ果てていましたが、同時に心の重荷が軽くなったのを感じました。

その時、大魔術師はサリールが尋ねる好奇心の眼差しに気づき、少年に教える約束をしたことを思い出しました。

「私はその...幽霊の猫を見たことはありませんが、あなたが言うように、私を連れてきたのであれば、それは天使である可能性があります。なぜなら、彼が私の魔法のバリアを破ることができたのは、バルラーミですらできなかったからです」

「鏡を使って彼と連絡を取ることができるかもしれません」とサリールは提案しました。

「忘れてください」とパラマスは答えました。「私だけが、ヒエロファントとして鏡を使えますし、それを絶対にしません。もし私が鏡を使えば、この領域と物質の領域を隔てるバリアが開き、この寺院は安全な避難所ではなくなるでしょう」

サリールは目を細めました。

「あなたの寺院から自由に出ることはできないと聞いていいのでしょうか？」

パラマスは言葉を選ぶためにためらいました。

「...残念ながらそうです。ただし、私を友人として見てほしいと願っています。あなたを出さないことはできないかもしれませんが、私は持っているものを全て共有し、あなたを命令したり強制したり打つことはありません。どんなにやんちゃでも」

「私はやんちゃではなく、これまでもそうだった」と少年は冷たく言いました。

「そうですね。あなたのように内気で頭の良い子供は問題を起こしません... 私が言いたかったのは、もし子供たちが巨人だったら、大人たちは彼らを殴らないでしょう。それは彼らが悪さをするからではなく、彼らが自分を守る力がないからです。無力な存在を攻撃する人々は、認めるか否かにかかわらず、悪魔の哲学、邪悪な異端のフィロソフィーを奉じています。力が正義を作るという欺瞞です」

サリールは頷きました。

「孤児院で最初の日から、ゴルゴの説教が「規律が人間を作る」というものは、単なるマゾヒズムへの洗脳だと気づきました。彼女のような酔っ払いの愚か者ですら、寝ている間は無力な存在だと自覚しているはずです。残念ながら、プロパガンダは常に効果を発揮するわけではなく、私の死んだふりが、きっと兄にとって望ましいきっかけになったことでしょう...」

パラマスは恐怖を感じてイフテュスの印を空中に描きました。13歳の少年がそんなに多くの憎しみを抱える必要はありませんし、それほど皮肉屋で冷酷で計算高い存在ではないはずでした。

「サリール、暗黒が心に侵入しないようにしなければなりません。私たちはイフテュスの例に習っているべきです。彼は自分を殺した者たちにも赦しを与えるために、十字架の上で息を引き取りました。なぜなら柔らかいものが硬いものよりも強く、水が岩よりも強力であり、愛が暴力よりも力強いからです...」

「私は分かります、先生。しかし、魔法を教えてください。私は多くの本を持っていますが、まだ師匠がいないので、秘術の本質を書面で明かすことはできません。それはロジアがイニシエートに対して書面で秘密の芸術を明かすことを禁じているからです」

「確かに、その理由は魔法があなたを誤った道に導く可能性があるからです...なぜ魔法を学びたいのですか？」と大魔術師は尋ねました。

「私は秘教的な知識に対する渴望を満たす必要があります」とサリールは答えました。「魔法は私にとって目的であり、手段ではありません」

パラマスは安心し、サリールが魔法を通じて満たしたいのは復讐ではなく知識であることを確認しました。

「その場合、私はあなたの弟子として受け入れます。そして、私があるあなたの師である以上、魔法について重要なことを教える必要があります。たとえあなたがいつか私の教えに反逆しようとも、これを忘れないでください」

サリールは静かに彼を見つめ、期待していました。

「魔法は心から生まれます。心は魂の座です。あなたの心が純粋ならば、あなたの魔法も純粋であり、あなたとあなたの近くの人々にとって祝福となるでしょう。しかし、あなたの心が不純で、邪悪な願望を抱くならば、暗黒の魔法を生み出すことになります。白い魔術師は禁欲的で謙虚で貞節であり、愛と善の考えが常に彼の行動の原動力です。黒い魔術師は人間の血を流すこと、犯罪、そして罪の後悔を完全に根絶するための執着によって彼の道を始めます。そして、罪深い方法で追い求めた物質的な達成を手に入れます。最終的に支払う代償は、不治の病に冒された闇の魂であり、永遠に燃え続ける光の中で我々全てが注視する運命です...」

「分かります、師匠。しかし、灰色の魔法はどうなのですか？それは理論的には光と闇の両方をマナ、霊的なエネルギーの源として使うことができると言われています」とサリールは尋ねました。

「グレーとブラックは、影のスペクトルの両極です。白とは対照的に、それらはそのスペクトルには含まれていません。灰色の魔法はあなたのような魂のような

存在を捕らえる罫です」とパラマスは断言しました。「そんな風に見なさないでください、私はあなたが良い子だとわかっていますが、私はあなたを通して、人間の心の闇に対するある種の魅了を感じます。あなたは選ばなければなりません、子猫」と彼は優しく言いました。

「私はもう選びました」とサリールは言いました。「闇には興味があるかもしれませんが、それは信用できないものです。また、不純さと残酷さを、愚かさと同じくらい軽蔑しています。この理由から、私の忠誠心は光にあります」。

5年後...

第II部 「第I章 「男の代償

アズライルは、彼の薄く美しい剣を振り回し、コロシラムの砂に血を飛び散らせながら、彼の対戦相手が地面に倒れるさまを見ていた。彼の剣の巧妙な一突きによって、相手は自分の血で窒息していた。観客席からは喝采が上がり、興奮が高まっていた。審判が近づき、彼を勝者と宣言し、1000枚の金貨の袋を手渡した。

アズライルは剣を鞘に収め、金貨を手に取り、言葉を発さずにコロシラムを出た。彼は騒々しい群衆を嫌い、さらに真昼の太陽も嫌いだった。目が眩まないようにフードを被って戦わなければならない。

彼の友人で師匠であるラスニスが外で待っていた。

「素晴らしい剣だった。まだ経験が足りないが、技術的な面ではほとんど教えることがないだろう。ところで、今日の食事に合わせて、最高の樹脂入りワインのボトルを買ってきた。人はそう簡単に18歳になるわけではないからね」

アズライルは薄く微笑んで、一つ目を隠していた髪を片付けた。彼は子供から青年に成長し、もう背は高くなったが、非常に細身で、ひげもはえず、柔らかい顔立ちのため、まだ15歳くらいに見えた。

食事が終わると、ラスニスは封をされた封筒を取り出し、アズライルに手渡した。

「今朝、これがポストに投函されていた」と言った。

アズライルは封を切り、手紙を取り出して読んだ。彼の最悪の疑念が確認された。

「召集がかかった」と彼は言った。

ラムリオス人を暴政に慣れさせ、反乱を防ぐため、グロスは健康な男性が18歳になると、兵士として2年間の徴兵、軍の奴隷として奉仕するように命じた。多くの人々が自殺し、または不具とな

り、健康な状態で帰還した者たちは洗脳され、家庭の内密で国家に反対する言葉を発した場合、自らの両親を告発することさえもするようになった。

アズライルはよく考え、徴兵に従うよりも自殺することを決めた。自由のない人生とは、死を解放にする苦痛でしかないからだ。

「このことで日が台無しになるなんて考えるな、相棒」とラスニスは愛想よく言った。「以前に説明した通り、私には医師の友人であるアトスがいて、必要な時に病気による免除を手配してくれるだろう。もうすぐ連絡が来るはずだ」。

数分後、ドアのチャイムが鳴った。ラスニスはそっと近づき、のぞき穴に目をつけるという、権威主義の政権下に生きる者にとって重要な注意を払った。ラスニスが動かずにじっとしているのを見て、アズライルは何かがおかしいことを察した。

「どうしたの？」と彼はささやいた。

目が回るような感覚から立ち直ったラスニスはアズライルに向き直った。

「アトスじゃないんだ」と彼もささやき声で答えた。「お願いだから、君の部屋に行って寝ておいて。病気を装う必要があるかもしれない。もし何かのために贈り物が必要なら、ここに金貨の袋を置いていってくれ」

アズライルは心配になりつつも、友人の声に恐怖心が感じられたので命じられた通りに従った。ただし、剣と一緒に持っていくことにした。二階に上がると、廊下を歩いて自分の部屋のドアまで歩いた。

再びドアがロックされたが、ラスニスは開けず、アズライルは友人が自分が部屋に入るのを待っていることを理解した。これにより彼は警戒心を抱き、自分の部屋のドアを開けずに閉めた。そうすることで、見られずに聞くことができた。

ラスニスはため息をつき、家のドアを開けた。

第二章 「信頼と友情」

玄関の門口には、丸刈りの黒髪をした背の曲がった男が立っていた。男はラスニスに貪欲な視線を向け、まるで目玉を引っっこ抜くかのような冷たい礼儀正しさを話した。

「私は医師組合から来ました。ドクター・コライスと呼んでください」

ラスニスはドアを開けてしまったことが過ちであることに気づき、まるで鉄槌が彼に襲い掛かったように感じた。おそらくはワインのせい、驚きのせい、彼の直感が彼がばかげた行動をしたことを叫んでいた。

「もしかしたら、間違いがあったのかもしれませんが。私はドクター・アトスを雇ったつもりです」

「ドクター・アトスはもう組合との関係を絶っています。昨夜...彼は不名誉な境地に立たされ、今は私が彼のポストを持っています。私の仕事をするために中に入れていただけますか」

ラスニスはぞっとした。明らかにこのコライスという男は、アトスを密告して彼のポストを手に入れようとしているのだろうということが分かった。この男がどのような人物かが分かった。ただ、少なくとも彼が腐敗した人物で、うまく買収できる可能性があることを願うしかなかった。もし今ドアを閉めてしまえば、疑いが持たれ、彼が次に「不名誉になる」のは自分だろう。

ラスニスは入り口から退いて、コライスに入るように手招きした。

彼らは対面して、リビングルームで座った。

「ワインでも飲みますか？」とラスニスはかすかな声で尋ねた。

「私の時間は金で買えるものです」とコライスはきっぱりと答えた。「私に、どうして医師のサービスを雇ったのか説明してください」

「あ-あの、聞いてください」とラスニスは言い始めた。彼の脳は迅速に働き、信じられる説明を作り上げるために全力を尽くしていた。「私は、若者の教育係をしていて、アズライルという名前の若者がいるのですが、彼は結核にかかっています...」ラスニスは自分の言葉のために自分自身を呪ったが、なぜかコライスに対して恐怖心を抱いていたため、冷静に考えるのが難しかった。

「問題は、その少年がちょうど18歳になり、徴兵に呼ばれたことです。彼は結核患者として免除される必要があります。彼自身のためと、仲間のために」

「わかりました。では、少年を連れてきて検査させていただきますか」

「残念ながら彼はとても弱っていて、ベッドから起き上がることができません」

「そうなら、私に彼のベッドまで連れて行って、そこで彼を診察させてください」

「わかりました。もし彼が寝ている場合に備えて私が先に行きます。私が呼ぶまで待ってください」

ラスニスは階段に向かって歩みを進めたが、コライスの声が彼を止めた。彼の声は鋼のように冷たかった。

「遊びはそこまでにしろ。アトスは何でもお望みに応じると数年間言ってきた。今度こそ、私を告発しない理由を教えてくれ」

ラスニスは素直に頷き、金貨袋をコライスの前に落とし、硬貨の音を聞かせた。

「1000枚の金貨です。お前のものだ。ただ、私と彼のことを放っておいてくれ」

コライスは嗤い声を上げた。彼の笑いは嘲りに満ちていて、邪悪さを漂わせていた。一瞬の笑いの後、彼はラスニスに sadistic な目を向けた。

「交渉できる立場にはいない愚か者。金貨を渡して、少年を連れてこい。それと引き換えに、告発するかどうか考えてやる。拒否すれば、私は自ら最悪の牢獄に送り込んでやる。何百回も屈辱を受け、ひどい侮辱に耐えなければならないだろう。特に、美しい十代の少年は…新鮮な肉」

ラスニスは泣き出した。なぜか彼はコライスと戦うことができないという感覚に襲われた。まるで何かが彼の意志を無効にしているような暗い魔力が働いているような気がした。自分自身を守る勇気さえ持てず、友人を守る勇気などなかった。

コライスは嫌悪の表情を浮かべた。

「泣き言をやめろ。それは命令だ。男は泣かないものだ」

ラスニスは袖で涙をぬぐったが、従順に従う以外に選択肢はないと分かっていた。

「わかりました」とラスニスは小さな声で言った。自分が裏切りをした罪の重さ、自分の友人を裏切ったことによる耐え難い恥ずかしさから解放されるために、彼が自分を殺してくれることを願っていた。

処理はきれいで速かった。血を振り落とした後、アズレイルは剣を鞘に納め、ソファに腰かけ、悲しみにくれた。

泣き止むと、少年は自分の足元に倒れている二つの死体を見つめ、冷たい笑みを浮かべた。

「私の運命は、亡き兄弟に報復を果たす日まで野郎としてさまようことのようなですね」と彼は考えた。「そうしよう。これからは、剣だけを信じ、それが私の唯一の友となるだろう」

第III章 「ヴァベルの塔

サリールは師匠に続いて砂漠を歩いていた。彼は立ち止まることも、道を外れることもできなかった。なぜなら、パラマスは老人とは思えない力で彼の手首を握っていたからだ。

突然、砂丘から7階建てのジグラットが現れた。サリールはその塊の頂上を見上げ、太陽が麻袋のように黒くなり、月が血のように赤く、星が空から地上に降り注いでいくのを見た。

奇跡に無関心なまま、パラマスはジグラットの入り口に進んで行き、その上にはアダメオ語で次の言葉が刻まれていた。

ILI ILI LAMA SAVAHTHANI

それはイエスが十字架で言った言葉で、「わが神、わが神、なぜ私を見捨てられたのですか」という意味だった。

苦しみの叫び声と泣き声、歯ぎしりの音がジグラットの中から聞こえ、サリールはパラマスが彼を苦痛の場所に案内していることを悟った。

「止まってください、師匠、止まってください！」と若者はパニックに陥って叫んだ。

しかし、パラマスは彼の声に耳を貸さずに進み続けた。サリールは絶望的に身をよじり、解放しようとしたが、老人の手は鉄のように固かった。しかし、アルキメイジはサリールのもがきに気づき、やさしく微笑みながら彼の方を向いた。

「落ち着いて、子猫。もうすぐ寺院に到着するよ。すぐに休むことができるよ...」

老人は歩みを再開し、無力で恐怖におびえる少年を不憫に思いながら、恐る恐るの中に無慈悲な塊に引きずり込んだ。

突然、静寂が訪れた。サリールは空中に浮かんでおり、師匠や砂漠、ジグラットの痕跡はどこにもなかった。若き魔術師は幽霊のような猫の存在を感じ、星座のように輝く一つのシギルが現れた。



サリールは目をまばたきながら夢から覚めたようだった。彼は寺院の中におり、絨毯の上に座り、師匠と一緒に瞑想していた。緊張して再び集中することができなかつたため、若き魔術師は立ち上がって外に出るつもりだった。

「どうしたの、子猫？」とパラマスはささやき声で言った。「なぜ瞑想を中断するのだ？」

少年は師匠が悪夢の中で自分を呼び捨てにしたような言葉を聞いてぞっとした。それは非合理的だと分かっていた。師匠が出会った日から彼をそう呼んでいた愛称に過ぎないことを理解して、冷静さを取り戻し、説明し始めた。

「瞑想中に幻視がありました...」

「それは予知ではない」とパラマスは言った。「あなたが言ったように、それはアルマの暗黒の夜です。あなたの瞑想を続けてください、私の愛される弟子よ。私はあなたに道を教えました。あなたの夜を私が代わって克服することはできません。」

アルマの暗黒の夜は、魔術師が意識を深淵の位相まで高める際に経験する試練です。それは魂によって異なるものですが、神から見捨てられたという錯覚、避けられない罰、心を破壊しかねない恐怖を引き起こします。

「それに、あなたが暗黒の夜に苦しんでいることに加えて、静寂の中で輝くシギルと幽霊の猫の存在を無視していることにも気づいています」とサリールは指摘した。「もしそれが私と同時に夜と予知の両方である場合、そのシギルを解読し、鏡に描くと、自分の霊的な案内者とコンタクトできるかもしれません...」

「もう知っているはずだ、まだ若すぎる私の弟子よ」とパラマスは割り込んだ。「この寺院の安全を危険にさらすために啓示を求める浅ましい欲望に駆られて、あなたの魔法は禁止されています。もしあなたがあの苦悩を和らげるためにそれほど必要なら、瞑想を続けなさい。他に道はありません。謙遜な放棄と熱心な慈善の道以外に。」

「...わかりました、師匠。二度とお騒がせしません」とサリールは冷たく答えた。「これからは一人で瞑想します」と彼は出て行く前に付け加えた。

パラマスはため息をついた。彼はサリールが感受性が強すぎる少年に対して厳しすぎたと感じたが、ヒエロファントとして、創造の中で最後のロジアの名残を守る義務があることを知っていた。そしてサリールがルールを自発的に従うことはないだろうと分かっていた。

第4章 「結合の神秘

数ヶ月が経ち、冬至が訪れました。

サリールの瞑想は、まだ鮮明に残るジグラットの幻影によって中断され続けました。彼は常に苛まれ、師匠に頼ることができなくなったことを思い出させられました。師匠は実際には彼に無関心であり、彼を運命に任せながら、秘術の知識の唯一の代替源へのアクセスを禁じました。彼が助けることを望まないか、できないかは関係ありませんでした。実際、彼の無力さは幻影で経験した盲目のように不気味に思われました。

悪夢から目を覚ますたびに、サリールはダアトの鏡を使う可能性について考えました。彼はシギルを解読し、幽霊の猫が眠っている間に彼を寺院に連れて行き、鏡を通して彼を導いたことを思い出しました。これにより、アーキメイジは鏡に対して霊的な権威を行使するために意識している必要があると結論づけました。それがなぜ彼が彼を脅迫し、彼の生活に意味を与えていた唯一のもの、魔法を奪おうとするのかを説明していました。

この時点で、パラマスが彼のために行ったこと、彼に与えた愛情と知識は、偽善的な施しに思えました。サリールのようなメランコリックな気質の人々は、特に彼らが愛されると主張する人々が彼らを傷つける場合、愛を無視するための言い訳を探し求める傾向があります。

最終的に、サリールは自分の視点から完全に合理的な結論に達しました。彼の師匠は本当は彼を愛していないという考えに彼は苦しめられましたが、同時に感謝や忠誠といった心の拘束から解放されました。

パラマスが眠っていることを確認した後、サリールは静かに移動して、他の部屋から紫のベールで仕切られたチェス盤の床の部屋に

忍び込みました。その部屋の中央にはダアトの鏡がありました。鏡は直径約2フィートの反射ガラスの円盤の形をしており、フレームの代わりになる2本の柱には、左側に黒い文字で「UR KASDIM」と刻まれ、右側に銀色の文字で「UR ELOHIM」と刻まれていました。

自分の姿をじっと見つめながら、サリールは腕を伸ばし、指先を氷のように冷たいガラスに触れました。冷たい触感を無視して、サリールは体をリラックスさせ、心を空にしました。ただダアトの鏡を活性化するという強い意志だけが残りました。トランス状態に入り、魔法のエクスタシーに酔いしれながら、サリールは幽霊の猫を思い浮かべ、幻視で学んだシギルをガラスに描きました。

「Ihthysの名において、私はあなたを召喚します：アレフ-ヴァウ-レシュ-ヨド-アレフ-ラメド」とサリールはつぶやきました。

彼の魔法に反応して、ガラスは夜のように黒く変わりました。鏡が触れることが痛いほど冷たかったため、彼は手を下ろすことをためらいました。サリールは手を下ろせば、彼の肉体が冷たい鏡にくっついてしまうという恐ろしいビジョンを見ました。彼は歯を食いしばり、痛みを無視し続け、接触を保ちました。

そして、ポータルが二つの目を開けました！彼は視線を外す、手を離す絶望的な衝動に駆られましたが、それをする前に二つの目が見えない鎖で彼を拘束しました。鏡が消えました！部屋が消えました！サリールの周りに何も見えませんでした。光もない。闇もない。何もありません！何も...ただ彼の目を捕らえている二つの目だけです。それらの目は灰色で、大きくて深く、長い瞳孔がありました。幽霊の猫の目です。サリールは、今日の接触を断つと、魂と体を結ぶ絆も断たれ、

死ぬことになることを知っていました。それから、二つの目が彼の意識をゆっくりと、しかし絶え間なく吸い取り始めるのを感じました。彼は、目に吸い込まれると同時に死を見つけることもわかっていました。彼は抵抗しようとして、彼はその目を自分に引き寄せようと全力を尽くしましたが、それは無駄でした。彼はどれだけ強力な精神力を使っても、その目に勝つことはできなかった。それらの目はまだ彼を引き寄せ続け、砂のようなものとして彼を吸い込んでいきました。

その時、サリールの頭の中でパラマスの声が響きました。彼の授業の一部が蘇りました。

「服、儀式、聖なる物品は、信仰の導体としてのみ意味を持ちます」とサリールの心の中でパラマスの声が響きました。

信仰。それが鍵でした。サリールは自己意識を取り戻し、自分が目を吸い込むのではなく、目を自分に引き寄せる存在だと想像しました。それを信じ、それを感じました。目は吸い込むことをやめました。まだ彼の視線は彼に向けられていましたが、もはや戦っているわけではなく、彼を支え、彼が失ったマナを与えていました。一つの声が彼の心の中で響きました。

「リラックスして。あなたの魂が私の魂を壊すことなく受け入れるだけの十分な強さを持っている今、私たちは結合することができます。私は長い間忘れ去られた多くの秘密を知っています。それらはあなたのものになるでしょう」。

若者は微笑みを浮かべました。

「わかりました。あなたは私を試していたのですね。もし私があなたの魔法に耐えられなかった場合、どうなっていたでしょうか？」

「あなたの魂は消耗していました。甘美な死です。あなたの魂は終わりのない時代まで私の中で眠り続けるでしょうが、私は眠りません。それは同じ魂が二度と啓示の実を食べることはできないからです」。

「二度と？あなたは果実を食べ、洪水を引き起こした魔術師ウリイルですか？どうしてあなたは幽霊のような存在になってしまったのですか？あなたは私に何を求めているのですか、あなたの贈り物を共有する代わりに？」

「人間には神秘の木が禁じられています。ただし、神聖なままで死ぬ者に限り、神秘の木のマナを使うことができます。それはホッドの光の一部であり、彼らはそれを使ったとき、人間の形、神の姿が失われます... アヴァターでさえ、ユクミニを歩いている時、私のこの不死性の呪われた存在から解放してくれませんでした。彼は人々が苦しみをもたらず自由を望んでいるからです...」。

ウリイルは言葉を切りましたが、遠くを見つめました。

「私たちの出会いがダアトの鏡にもたらず騒乱が、あなたの師匠を目覚めさせました。まだ間に合ううちに、夢で見た運命に従うか、私があなたの内部に眠ることを許可するかを決めなければなりません」。

少年は苦笑いを浮かべました。

「決めること？実際のところ、選択の余地はありません。未熟な神秘家として、私は自分の精神が壊れることなく拷問に耐える力を持っていません。あなたを入れてください」。

「ああ、サリール、何をしてしまったんだ？」 パラマスは叫びました。パラマスの意志に従い、ダアトの鏡は封印されました。

「私はこの寺院の向こうに広がる世界を見ているだけです」「若者は無言のまま目を開けて言いました。彼の若い顔とは対照的に、彼の目は老いて疲れているように見えました。「今、私がこれらの言葉を口にする間に、マジの星が水瓶座の中に昇っています...」

パラマスの顔は暗くなりました。

「90日以内に、最初の月の最初の日の最初の光と共に、魚座の時代は水

瓶座の時代に変わります。それは聖書に予言された野獣の支配であり、創造のどこにも闇から逃れる場所はありません。それが起こる前に、私は啓示の木にたどり着き、新しい洪水を引き起こすためにそれを使用します。創造は神聖な光によって飲み込まれ、すべてが終わります」

パラマスは首を振りました。

「あなたは光によって自殺するために、創造を巻き込むつもりです。それは、悲劇的ではあるが予言という名のもとに成り立つ行動です。目的が手段を正当化するわけではありません」

「それが私の人生の意味です。私の存在が馬鹿げた悲劇以上の何かである唯一のものです」「サリールは反論しました。

「それはただのニヒリスティックな幻想であり、あなたの思春期の自尊心にからみついたものです。あなた自身の存在を後悔することが自殺する良い理由かもしれませんが、それは世界を破壊する権利を与えません」

若者は苦笑いを浮かべました。

「そうですか、私にはそれがありません。それは黄金の法則です。'あなたの隣人を自分自身のように扱いなさい」

「あなたはそれが文字の精神に違反する皮肉な解釈であることをよく知っています」「パラマスは断じました。「あなたは闇の中で啓示を受けながら、地獄を心と心に抱えて啓蒙に至ることはできません。あなたの狂気を続けるならば、私はあなたの魔法を封じるしかありません。あなたに挑み、裏切られたにもかかわらず、私はそれをしたくありません。あなたはすでに十分に苦しんでいるからです...」

「自発的に計画に協力してくれることを望みますが、あなたは盲目です」「サリールは危険なほど静かな声で言いました。「先生、これは慈悲の行為と考えてください」

パラマスが反応する前に、サリールは指先をダアトの鏡に置き、

パワーワードをつぶやきました。その精神的なパルスは高齢の脆弱な心臓に致命的であり、パラマスはその場で倒れ、床の上で死んでしまいました。

サリールは自分が人生を奪った手を見つめました。彼はこの対決を恐れ、彼の唯一の友である師匠の命を奪うことに対する耐え難い後悔に苛まれると思っていたが、何も感じませんでした。自分の内なる理想である結合の神秘の芸術と、魔法の象徴である召喚の芸術を結びつけて、神聖な光の中で創造が消える様子を見ながら息を引き取ることへの欲望以外、何もありませんでした。この理想が彼の心を満たしていたため、他には場所がありませんでした。

「私は何も感じない。人間の生命、自分のものも他人のものも、自分の理想に奉仕する限りにおいてのみ価値があります」「サリールは結論付けました。「さらに、それは清々しいですし、迅速でした。バベルの塔が再び立ち上がる時、彼が待っていた残酷な運命からの解放です。彼は気づかずに私を引きずっていました」

自己陶酔から抜け出した若者は、自分の姿を見つめ、新たに変わったイニシエイトの帽子が太陽のティアラに変わっているのを見ました。彼の背後には、パラマスの死体が灰となり、聖なる香りを放って消えてしまいました。半笑いを浮かべながら、サリールは手をダアトの鏡に伸ばしました。

「今や私がハイロファントです。魔法の道を私に開いてください、兄弟よ」

ダアトの鏡は彼の魔法に反応し、光のビームをサリールを光の輪のように包み込みました。一瞬後、若者は自分の体が光と一体化し、ダアトの鏡に吸い込まれて消えました。

第5章 「現実と認識

アズライルはフードをかぶり、静かに、彼の孤児院と似たようなフェンスを飛び越え、ヴィザンティオンの外れにある墓地に忍び込みました。彼のような亡命者にとっては、彼の顔が「捜査中。逃亡と殺人で生きたままでも死んでも。」と書かれたポスターに載っているため、宿屋に頼ることは危険でした。この不気味な場所は、出現と幽霊に関する噂のため、ホームレスさえ避ける場所であり、彼にとっては最善の選択肢でした。

すでに眠りに落ちかけていた頃、墓石に寄りかかっているアズライルは、存在を感じました。猫のように素早く、彼は剣を抜いて立ち上がり、剣を前に出しました。彼の前には、彼がこの生涯で再び見ることを期待していなかった人物が立っていました。

「ずいぶんと時間がたったね、アズライル」「サリールが言いました。

衝撃を受けた剣士は、ゆっくりと武器を下げました。

「噂が本当だったのか」「彼は自分自身に言いました。「この場所は幽霊を引き寄せせるのか。

「よく見て、アズライル。そして、私が幽霊かどうかを自分で判断してください。

アズライルはサリールを見つめ、自分の顔の映り映える姿を見ました。彼の顔は、彼が5年前に自殺に追いやられた少年ではなく、若い男の顔でした。不可解なことに、アズライルは自分の双子が生きていて、彼が着ている服からも、彼が入信したことを理解しました。

「どうしてそんなことが可能なのか？ 私はあなたの死体を見た。触れたことさえある。」

「...そして、私の最後の思考があなたの心に響く中で、それは消え去りました」サリールは言いました。それは質問ではなく、主張でした。

「説明させてください、アズライル...サリールは兄弟にパラマスについて、マギの星につ

いて、そしてウリールとの出会いについて話しました。」

「...彼は素晴らしいスピリットガイドでした。他の秘密とともに、彼は私に秘められた真実を明らかにする力を伝えました。たとえば... 「サリールは呪文をつぶやきました。」

アズライルは目を見開き、夢から覚めるような感覚がありました。そして、それまでのサリールが自分と同じくらい現実的に見えたのは、実際には非物質的で透明な存在だったことに気付きました。

「兄弟...」つぶやいた。

魔法使いは微笑みを浮かべました。

「私には血のつながりの兄弟はいません、アズライル。私の両親が愚かさを犯して、魂を物質の束縛に閉じ込めたのは一度だけです」。

驚いた剣士は、サリールの言葉だけでなく、それがテレパシクなリンクを確立しないまま自分の心の中で聞こえたことにも戸惑いました。

「私の声を聞いたことはない、アズライル、ただ心の中でだけだ」「魔法使いは彼の考えに応えました。」

「それ以外の方法はありません、あなたはトゥルパ（心の中で生み出された人工の霊）であり、私に十分な親和性がある信頼に値する存在であり、同時に私の弱点を補完できるだけの異なる存在です。あなたは私が孤児になった後、一人では生き残れないと直感しましたので、私が持っていた魔法の知識をすべて使ってあなたを召喚しました。しかし、11歳の自己学習者は、いかに才能があっても真の魔法使いではありません。召喚の過程で、私は魔法の制御を失い、気絶しました。数時間後、あなたが私の体で目を覚ますと、私は体外にあり、夢の中を歩く者のように幻覚に取り込まれていました」。

「でも、私たちだけでなく、私たちが双子のように感じていることも説明できるでしょう。アエティオス、ゴルゴ、クルゴス... どう説明するのですか？」

サリールは微笑みを浮かべました。

「現実には認識に依存し、私たちの認識は魔法によって曇らされ、現実と区別できないほど実体化された体験を生み出しました」。

アズライルは黙って立ち尽くし、自分の人生を基盤にしたものがただの幻想であることを受け入れようとしていました。

「...これは、私が強制的に自殺させられたあなたへの復讐であり、私が人間の血を流すことに抵抗感を持たなくなる原因となった悲劇が、単なる妄想だったということの意味します。あなたに

害は与えられなかったので、彼らの罪に復讐したわけではありませんが、彼らの罪についての私たちの幻覚は変わりません。人々を駆除することは、疫病を根絶することと変わりません」。

「では、今はどうなるのですか？」「アズライルが言いました。「あなたは自分の体を取り戻すために来たのですか？...私を追い出す、もしくは何かそういうことをするのですか？

「なぜそんなことをする必要があるのでしょうか？ 私の体を、あなたの方が私よりもはるかに上手に守れるでしょう」

「サリールは答えました。「私は非物質的な幽霊のままに生きることに問題はありますが、私の計画を実行するためには、あなたの剣が必要です」。

アズライルの顔が輝きました。

「当然です。心の底では、私はまだあなたの双子の兄弟です。私の剣はあなたのものです。

その時、ダガーが空中を飛び、アズライルの後ろの墓石に突き刺さりました。ハンドルには巻かれた紙がありました」

剣士は紙を広げ、月の光の下でそれを見ました。そして、それをサリールに見せました。

今夜、大闘技場で死闘。

「皮肉なことですね「アズライルはコメントしました。「この機会を求めて7ヶ月も探し続けてきましたが、今、疲れ果て、40時間以上も眠らずにいるときにエティオスが私の手の届く範囲に現れるのです」。

魔法使いは微笑みを浮かべ、アズライルの額にシジルを描きました。すると、剣士は疲労感が消え去るのを感じました。眠る必要がなくなったわけではありませんが、今のところ眠る必要性が封印されていると感じました。

「行け、兄弟、私の祝福を受けて」「サリールは言いました。「私は精神的にあなたと共にいます」。

第6章 - 剣に生きる者...

真夜中、雪が降る曇り空の下、アズライルはヴィザンティオンの街を歩きながら、市内のコロセウムに向かいました。それは堂々とした立派な建物で、イクミニ全体で最も大きな円形闘技場でした。

アズライルは亜麻の衣服しか身に着けていませんでした（彼はウールがかゆくて嫌いでした）、寒い冬の夜風は内向的な性格のため、まったく苦になりませんでした。彼は寒さには強く、暑さには弱かったのです。

鍵のかっていない門を通り抜け、アズライルは巨大な競技場に続く通路を進みました。

若者は、パルコから彼を見つめる細身で優雅な姿の人物を見つけました。彼は曲刀を手にしていました。アズライルは剣を抜きました。

その人物は軽やかにアリーナに飛び降り、黒い服を着ていました。寒さも彼には影響を与えませんでした。それは氷に親和性があるわけではなく、彼の目には燃える火のような魂が宿っていたからです。

「いい風だ。これから始まる祝宴に相応しい」とアエティオスは血に飢えた声で言いました。

アズライルは答えませんでした。言葉は必要ありませんでした。

両者は少しずつ近づき、剣の一撃で相手を貫く距離で停止しました。剣の刃は変わりゆく光を放ち、青白い閃光を発し、最初はかすかな音を立てて空気を切り裂きます。二人の体は完璧なダンスのような動きでバランスをとり、死を待ち受ける力の点を探し求めます。

そして、刃は青い閃光と共にぶつかり、鮮明な音を立てながら次第に速く、加速していきました。致命的な剣の刃が肉をかすめ、敵の鋼鉄を滑り、目、額、心臓に向かって進んでいきますが、予期せぬ動き、相手の心、腕、刃の回避によってそれ

がそらされます。曲線対直線、形状は異なりますが、軽さ、速さ、優雅さでは共通しています。もし公開の決闘であったら、観客席は沈黙し、敏捷な剣士たちが踊る殺人の美しさに魅了されていたことでしょう。

突然、両者は新たな攻撃の準備をするために前方に先端を向けて停止しました。

アズライルは自分のチャンスを見て、剣を振り下ろし、死の冷たい息吹を眼に宿らせました。悪魔のように素早く、アエティオスは剣を挟み込み、勇敢な連続攻撃で応戦し、敵を挑発しました。衝突する際に火花が散り、一瞬アズライルの剣が折れそうになりました。

しかし、それは一瞬のことでした。アズライルは一瞬姿を消し、次の瞬間、彼の剣の先端がアエティオスの胸に突き刺さりました。暗示された痛みと驚きを含んだような音をアエティオスが出し、必死の一撃でアズライルを巻き込もうとしました。しかし、アズライルは準備ができており、手首を回転させてスリムな剣を抜いた後、相手が到達する前に跳び退きました。アエティオスの剣は空を斬り、致命傷を負った彼のバランスを崩してうつ伏せに倒れました。

「これが私の宿命…」とアエティオスは自分自身に言いながら、自身の血で雪を赤く染めながら微笑みました。「剣に生きる者…剣によって死ぬ者だ…」

息も絶え絶えのアエティオスは最期を迎えました。アズライルは微笑みを浮かべながら、剣から血を振り払い、鞘にしまいました。

その直後、若者は倒れる感覚を覚えました。彼の疲労を封印していた魔法の印が破れ、睡眠の借金と戦いの労力は、細身の体には大きすぎました。サリールの声が彼の心に響きました。

「眠れ、兄弟。恐れることはない、私があなたの眠りを見守る」と。

そして、すべてが黒くなりました。

第七章 - 霧の仮面

アズライルの意識を抑制して、サリールは彼の体に入り込み、既に7年ぶりに肉体に宿ることとなった。

魔法使いは、暗殺者の死体に向かい、彼の左手から銀の指輪を取りました。その中心にはダアトの鏡の小さなかけらが装着されていました。この器具は、異端者を追跡し追い詰めるためにエティオスに与えられたものでした。

サリールはその指輪を自分の指にはめ、軽く微笑みながら力強い言葉をつぶやきました。その瞬間、サリールは魔法に包まれ、ヴィザンチオンの廃墟の中、ダアトの鏡の前に具現化しました。聖域の外、祭壇の上には、大理石の彫像がありました。それはスリムな体とアポロのような顔を持つ若者の姿でした。

「幻想を晴らし、隠された真実を私の目の前に明らかにせん」とサリールはつぶやきながら、空中に印を描きました。

銀色の光が寺院全体に広がりました。ダアトの鏡の後ろ、目に見えない見かけの幻を通じて、金髪で人形のような顔をした女性が彼を盗み見ていました。彼女は深紅のベロアのドレスを着ており、身体には妖艶な切り込みがありました。彼女の額には金のバンドが巻かれており、その先には月の冠となる形が現れていました。

「こんにちは、アルコント」とサリールは言いました。彼の声には、自称の虐げられた者が自分自身に与えた称号に対して皮肉っぽさが含まれていました。「お前は自分の暗殺者の帰還を期待していたのだろう。しかし、彼にはもう二度と会うことはないだろうね。」

ヴァルラーミはサリールの目を見つめ、彼の心を探ろうとしましたが、サリールが見せたい思い出と考えだけを見ることができました。彼女がサリールの導いた道を外れようとするたびに、彼女は心理的なヴェールに覆われ、視線ですら透過できない霧の仮面に隠されてしまいました。彼女は若者の魔法が自分のものを二度も超えていることを外に表すことはなく、髪の波紋のように優しい声で言いました。

「アエティオスの死など私には関係ないわ。長い間、彼は迷惑でしかなかったわ。また、彼がパラマスにたどり着けるはずもなかったわ。彼をあなたの手で殺される様子を見ることは... 絶対的な喜びで、尚且つ、ユーヌコの失われたことを十分に補っています。とはいえ、私の敵の敵が必ずしも私の友ではないわね。あなたの動機を説明してくれませんか？」

「私の師を排除したのは、彼が『不可侵』と豪語していた彼の寺院が次の春分の時にわなとなることを阻止するためだったからだ」とサリールは言いました。「おそらく、あなたは知っているでしょう。90日後、エレフスがこの世界に戻り、あなたが長い間戦い続けてきた玉座を奪い取り、あなたはただの他の奴隷になるのよ、他の人間と同じように...」

ヴァルラーミは何も言わず、サリールに話を続けるよう黙示的に促しました。

「あなたは神が悪の原因であり、創造主が私たちの敵であり、エレフスがエリュンの闇の化身であると信じています。あなたは神がイフティスという光の化身を傷つけることで、彼の誇りとも呼べる正義という名のもとに彼の数少ない選民を許すために、自らの誇りであるという、言葉を濁した正当性を満たすために、十字架へと導いたと考えています。そして、あなたは選民であることを望んでいる、というよりも、望むしかない、と思っています。あなたが預言者として彼に仕え、異教的な野蛮人であるフランゴスを彼の聖戦士に変え、'異端者'であるパラマスの

王国であるルメリを征服したとしても、あなたの魂は私の魂と同じく、永遠の火刑台に運命付けられた可能性が多く存在しています。なぜなら、創造主が絶対的な権力を持って創造物に与えることのある、彼の恣意的な裁きがそうだからです。私の言葉は間違っているのでしょうか？」

「違うないわ。私は主権の神に仕えているのよ」とヴァルラーミは言いました。

サリールは薄く微笑みました。

「仕えている... だけど、お前は彼を憎んでいる。お前は神も、お前の隣人も愛することはできない。お前は彼らを全く腐敗した存在と軽蔑しており、彼らは永遠の苦痛に値すると考えているのよ...」

「その通り、私は神を憎み、人間を軽蔑しているわ」とヴァルラーミは言いました。「どこに行きたいのかしら？」

「啓蒙の木へ。その実は創造物を超え、人間を天使にすることができる。アダムの呪いを取り除くよ。もし私たち二人がその実を食べれば、エレフスよりも強力になることができる。それは、あなたが理解できる言葉で言えば、神を殺すことができるということです。そして私たちは、この一瞬においてすらも神に阻止されることはありません。実際、彼が私たちを永遠に拷問しているのは、私たちの反逆が彼の誇りに永遠の傷を負わせるからです。地獄に君臨することは、天国で仕えることよりも価値があるのです」

サリールの声は、ヴァルラーミにとってまるでドラゴンの声のように力強く催眠的でした。彼の凍りついた視線は燃えるような冷たさを持っており、彼の美しい少年の顔が天使の顔ではなく、墮天使の顔に似ていた瞬間でした。若き魔術師は女性の混乱を感じ、自分が勝利したことを知りました。

「...私たちの野望は相容れるようですね」とヴァルラーミは結論を出しました。

サリールは悪意に満ちた微笑を浮かべました。

「私の計画を説明させてください。洪水がパラディソス、古代の世界を埋め尽くしたとき、啓蒙の木は霊的な領域に隠されました。それに到達するためには、現実の魔法と神聖な魔法、天国の鍵と呼ばれる魔法を交わさなければなりません。それによってダアトの鏡にポータルを開くことができます」

「ならば、パラマスの死後、あなたが精神的な権威の体現者となるなら、私の魔法と...」

「あなたの魔法ではありません」とサリールは中断しました。「あなたは月の冠をかぶり、ルメリを支配していますが、あなたは戴冠されていません。真の月の冠の持ち主であるアルコントの魔法だけが私のものと結びつき、天国の鍵を呼び出すことができるのです」と彼は祭壇に目を向けながら付け加えました。

「カナヴォス？」とヴァルラーミは尋ねました。「彼の運命はもう7年前に果たされ、彼はエレレフスのために石の眠りに落ちました。私の魔法でさえ彼を目覚めさせることはできません」

中断をすることなく、サリールは薄く微笑み、祭壇に近づき、手を伸ばし、力強い言葉をつぶやきました。

魔法に満ちた空気が弓なりに湾曲し、彫像が眠りから目を覚ますように点滅しました。彫像はもはや彫像ではなく、黄金の目と銀の髪を持つ少年の姿に変わりました。彼は紫の絹で服を着ており、アルコントにふさわしい姿でした。

「うまくいったね」とヴァルラーミは言いました。彼女は自分の魔法を超えたこの三度目の力の示しに魅了されていました。

サリールはめまいを感じ、祭壇に寄りかかりました。

「私の魔力は使い果たした。私は眠りを必要としている」と彼は言いました。

「だったら眠りなさい」と偽のアルコントは答えました。「今からあなたは私の宮殿の客人として扱われることができます。」

第8章 - 侮辱

1時間後、カナヴォスはショック状態で、ヴィザンティオン宮殿の地下牢の一つの壁に繋がれていた。ヴァルラーミは、まるでコブラが獲物を見つめるかのように彼を見つめていた。彼女の後ろには、黒い鉄の鎧を身に着けたグロスが立っていた。フランゴス族の首領である彼は、身長が高く、がっしりとした体格で、40歳くらいの男であり、幅広い首と焼けた肌の粗野で野蛮な顔をしていた。彼の右目には、7年前にカナヴォスが放った矢で視力を失った傷があり、彼がヴィザンティオンの城壁攻撃を指導した際の戦争で彼の残虐な略奪行為が彼に「ブロンドの野獣」というあだ名を与えた。

「目を覚ませ」とヴァルラーミは口ごもりました。

グロスはカナヴォスを振り回し、カナヴォスはヴァルラーミに憎悪に満ちた目を向けました。

「これは何なんだ？」「神は主権者である。彼はあなたを18歳の誕生日に石の眠りに落とす運命に差し向けた。それは不妊の女性の腹の中で魔法で作られられた完璧な肉体の若さを保つためだ。しかしながら、あなたが運命に従っても、私があなただの民を征服したことで私を憎んでいることは知っている。エレレフスにとってはそれがどうでもいいことだが、あなたの人間の魂を取

り込んで再生すると、その深い憎しみが私に影響を与える可能性がある。あなたの憎しみを引き継ぐことを防ぐために、私はあなたの心を壊し、あなたの意志力を破壊しなければならない。だからこそ...」

偽アルコントはカナヴォスの股間をいじり始め、蛇のような目にサディスティックな輝きが宿った。

「君は苦しんでいるのか？」

「君が私を憎んでいるにも関わらず、君の十代の体が私の手に反応せざるを得ないを感じているとき、それに対して苦しんでいるのだろうか？」

「狂った女！」とカナヴォスは叫びながら、鎖に無駄にもがきました。「私は闇の王子だ！君は私に触れることはできない！だめだ！」

グロスはカナヴォスを殴ろうとしたが、ヴァルラーミが彼を制止しました。

「無礼な子供だ、彼は貴婦人に声を荒げることを学ぶ必要がある」とブロンドの野獣はごねた。

ヴァルラーミの目は怒りに燃えていた。

「この若者の体はエレフスの姿なのを忘れないでください。彼の預言者として、私の責務はそれを無傷で保存することです。はっきりしましたか？」

「は、はい、お嬢さま」とグロスは小さな犬のように従順に答えました。

ヴァルラーミは中断を防ぎ、再び彼女の無防備な犠牲者に注目しました。

「君は私を「狂った女」と言ったようですね」と偽アルコントの声はより柔らかく、より邪悪になりました。「私はそれを褒め言葉と受け取るわ。」彼女は再びカナヴォスの股間をいじり始めました。「グロス！」「自分の妻とセックスしていると見られるのを見ながら、何もしないのか?!」

ブルドッグのような顔にサディスティックな笑みが浮かびました。

「いい試みだが、通用しない。お前は俺の妻とセックスしているわけではない。お前は俺の妻にレイプされるんだ、それは違う。レイプは権力の問題であり、セックスではない。俺自身も戦争で無数の男たちをレイプしてきたが、だからといって私が同性愛者だというわけではない。」

カナヴォスは黙りました。抵抗することは無駄だった。絶望、恐怖、無力感が彼の声を口にするよりも、最悪の口封じとなりました。彼は目を閉じ、できるだけ早く全てが終わるのを待ちました...

夕食の時間になり、召使いがサリールを起こし、彼を宮殿のダイニングルームに案内しました。中央には、貴重な木材で彫られた大きな長方形のテーブルがあり、その上には美しい食器が並べられたシルクのテーブルクロスが敷かれていました。暖炉では火がパチパチと音を立て、部屋は暖かさに包まれていました。

テーブルには約20人分の席がありましたが、この日は3つの椅子しかありませんでした。最高の席にはヴァルラーミが座り、彼女の右にはグロスが座り、左にはサリールが座っていました。偽アルコントの指示で使用人たちは料理を運びました。スパイスで焼かれたファザント、ヴァルラーミとサリールにはワイン、そしてグロスにはビールが供されました（フランゴ人はワインを飲まず、それは女性らしい飲み物だという迷信に取り憑かれています）。

「イティスの血がこのユールの中で神の怒りを鎮めるように」とヴァルラーミは杯を掲げて言いました。

グロスはジョッキを掲げ、一気に飲み干し、カトラリーを無視して豚のようになががたと食べ始めました。予想外に、サリールも杯を掲げました。

「自由の木が暴君の血で潤されますように」とサリールは言いました。

グロスはテーブルクロスで油を拭い、ゲップをしてサリールを憎みました。

「自由は弱者の夢であり、危険な考えであり、無政府状態につながるものです。私の理想は戦争であり、力が正義を作り出す最も純粋な表現です。」

「その場合、君が寝ている時に刺し殺されても文句は言わないでしょうね。無力で防御のない状態で、君の卑劣な哲学に敬意を表して刺し殺されるのですから」とサリールは冷たく答えました。

憤りに満ちたグロスは立ち上がり、テーブルに拳を叩きつけました。

「この馬鹿な下級生が階級制度に逆らうとは、どういうことだ!？」

サリールはヴァルラーミを見つめ、心の中でテレパシーの絆を結びました。

「君たちは無関心のふりをしているが、もし私が死ぬとしたら、どうするつもりだろう？フランゴ人たちはグロス以上に君たちを崇拜している。彼らに嫌われることなくフルーツ・オブ・エンライトメントを手に入れるために、この嫌悪感を抱いている野蛮人の命のために生きることをあきらめるつもりですか？彼らにとって嫌悪感を抱いている夫と寝床と玉座を共有し続ける意味はありますか？」。

ヴァルラーミは斜めに微笑みました。

「退け」と彼女はガードに命じました。

フランゴ人たちは戸惑いながら立ち尽くしました。

「これは一体何なのですか、ミレディ？」とグロスは尋ねました。

「私があなたを夫にしたのは、あなたがフランギア中で最高の戦士であり、最高の戦士をリードするためでした。しかし、あなたは7年の宮廷生活で隠れており、宴会や酒盛りに興じ、あなたの剣が鞘に錆びつくのを黙って見過ごしていました」とヴァルラーミは言いました。

驚きと不安を抱えながらも、フランゴ人の氏族は弱さや臆病さを見せる男性を死刑にする風習がありました。ヴァルラーミが彼の兵士の前で巧妙にほのめかし、彼を挑戦させる以外に選択肢はありませんでした。

「出て行け」とグロスは警備員に言いました。「そして、ドアを閉める。」

サリールは体から抜け出し、アズライルに意識を戻しました。アズライルはまるで夢から覚めるようにまばたきました。サリールの声が彼の心に響きました。

「すべて私の計画通りです。私は我々の土地を血と火で征服した野蛮人の英雄との一騎討ちを仕組みました。彼を殺せ。」

状況を理解したアズライルは警戒姿勢をとりました。グロスは黄金の柄とアルファンジの刃を持つ壮麗な剣を抜きました。

「私にとって、一撃が当たれば君を二つに裂いてしまうだけだ、ゴミカスのカラダ」とグロスは唸りました。「そして、君が使うその『剣』では私を止められないよ」彼は嘲笑的に付け加えました。

「重い武器を使う者は自分の腕前に自信がないのです」とアズライルは冷たく答えました。「私は大きく強くはありませんが、速いです。君が私に斬りかかる前に、当てることができるかどうかは君次第です、猿男。」

大男は狂った犬のようにアズライルに突進しました。刃がぶつかり合い、火花が散り、衝撃の力は若者を後退させるほどでした。グロスはアズライルに向かって再び振りかざしましたが、アズライルは素早く身をかわし、敵の額に巧妙に切り傷をつけました。血が彼の唯一の正常な眼を覆いました。悔しさのあまり、グロスはアズライルに水平方向の一撃を繰り出しましたが、アズライルは簡単にかわしました。

「臆病者め！」とグロスは叫びながら血を拭おうとしました。「踊るように戦うのはやめて、男らしく戦いなさい！」

アズライルは嫌味に微笑みました。グロスは次々に振りかざして、自分の巨体、力、重さを利用してアズライルを押しつけようとしていました。冷静さを保ちながら、アズライルは敵の突撃を避け、機会を窺っていました。正確な一突きで、アズライルはグロスの大腿動脈を断ち切りました。グロスは膝まずくと同時に出血し始めました。必死にグロスは最後の突きを試みましたが、アズライルは巧みに後方に跳び上がりました。

「このように常に暴君に対して戦いましょう」とアズライルは言いながら、剣から

血を振り払いました。

「ガード！ 彼を殺せ！」とグロスは叫びました。

フランゴ人たちはドアを開けようとしたのですが、ヴァルラーミの一つの視線で止まるようになりました。女性の影響に従順になりました。

「ミレディ…」とグロスは懇願しました。

ヴァルラーミは斜めに微笑みました。

「女性は男性を守るために存在しているのではありません。男性が女性を守るために存在しているのです。さようなら、私の愛しい夫よ。」

グロスは死を抵抗するために必死に戦いました。息を切らせ、四つん這いになり、剣を必死に掴むかのようにしていましたが、自分の命を掴むことはできませんでした。数秒後、視界が曇り、彼は自分の血の溜まった床に倒れました。グロス、ベスト・ルビアは彼の生涯と同じように死にました：彼の女性の足元で紳士として、彼女の飼い犬のように。

第十章 - 犠牲

アズライルは剣を鞘に収めました。突然、彼の周りの全てが消え去りました。全て、ただサリールだけが彼の前に立っているように見えました。

「君の剣は素晴らしいものだね、兄弟よ」とサリールは言いました。

「ありがとう、でもそれを言う資格があるかどうかわからないよ。グロスは強く、肉付きが良くて凶暴でしたが、年老いて疲れており、鈍くて不器用になっていました。かつて私の師と剣を交えた不敗の戦士の影のような存在ではない。なぜ私を自分自身の精神の中に連れてきたのか、私たちが墓地で話した時には、私には明らかになっていない詳細があります」と彼は言いました。

「ここに連れてきたのは、私の計画について、あなたに直接関係するいくつかの詳細があるからだよ。これ以降、私は自分の全てのマナを利用する必要があるんだ」とサリールは答えました。

「兄弟、それなら私があなたを守る必要があるんだ」とアズライルは言いました。彼は言葉の意味を察知していました。

「そうなら、私に吸収されてもらおう。あなたの意識は消えてしまいますが、あなたの武術の知識と記憶は私の心に残るでしょう」とサリールは言いました。

「いいえ。他に方法があるはずですよ。私たちが最後まで一緒に生きていける方法があるはずですよ」とアズライルは言いました。

サリールは微笑みを浮かべました。

「思っていた通り、兄弟としての願望が守護天使としての願望を凌駕している。だから、あなたは自己犠牲をすることができないんだ。でも、どんなに願っても、あなたは人間にはなり得ない。あなたはトゥルパ、召喚者の体を乗っ取って生きることしかできない人工的な霊なのだから。あなたが私を吸収しなければ、私はあなたを吸収することはできませんが、あなたを消滅させることはできます。それを知っている以上、私を最後の一度だけ守ってくださいませんか？ 剣の技を私に託してくださいませんか？」とサリールは冷静に言いました。

アズライルは長い間黙っていました。

「いいえ」と彼は最終的に苦い声で言いました。「私は私の双子の兄弟の守護天使です。それが私の存在意義です。もし私があなたにとってただのトゥルパで使い捨ての道具でしかないと思っているなら、なぜ私を守り続けるべきですか？」

「私にとって、自分自身や他の人々の命は使い捨ての道具であり、存在の意義は私の存在に意味を与える理念にとっての有用性に依存する手段です。トゥルパとしてのあなたか、私の双子の兄弟としてのあなたかは関係ありません。もしそれが私の計画への協力を続けるのに役立つなら、あなたを...」

「関係ありません」とアズライルは中断しました。「あなたが心を凍らせたことがはっきりとわかる今、私があなたの双子の兄弟であろうと容赦なく私を犠牲にするでしょう。しかし、私が存在するためにはあなたのマナを必要とするため、私を吸収することはできませんが、私を消滅させることはできます。私がトゥルパである理由は、私が私のマナを依存する霊であるからです」

「分かりました」とサリールは答えました。「あなたは人間になるために必死に努力して、人間のように考えたり感じたりすることができるようになりました。あなたの真の本質を意識することが何らかの違いを生むことはありません。あなたはその存在に意味を持たせるために、罪深い愛着という狂気さえも手に入れました... あなたの物語はこの善意の誤りの宇宙における数え切れない悲劇の一つです」

サリールは手をアズライルに差し伸べ、シジルを描きました。

「アレフ・メモ・タウフエン・メモ・タウフエメスエン・メス。イフティスの名において、よし、君に追放を命じる、魂の同胞、アズライルよ」と彼は言いました。

精神的な結びつきが霊と召喚者を結ぶ結び目が切れ、マナの源がなくなったトゥルパは虚空に消えていき、存在しなくなりました。

サリールは自分の意識を物質界に戻し、自分の体を取り戻したことを満足げに感じました。

彼はグロスの使用人の一人に近づき、アズライルの剣を彼に手渡しました。

「何...？」と使用人は呟きました。フランゴ人は何も言うことができませんでした。サリールの目が彼の目を捉え、彼の意識は緑灰色の霧に包まれ、氷の壁となりました。

「見つからず、誰にも気づかれずに宮殿を出て、この剣を誰にも見つけられない場所に埋めてください」と彼は命じました。

フランゴ人は催眠術にかかったように剣をサリールの手から受け取り、彼に一礼をして驚きのまなざしを浴びながら使命を果たすために去っていきました。バルラーミはサリールに近づいてきました。

「カナヴォスに対してあなたのホワイトマジックを使うべきだと思います。私はいくつかの自由な解釈をしたので、彼が私たちの計画に参加することができないほど傷ついている場合、役に立たなくなるでしょう...」と彼女は囁きました。暗い意味がほのかに伝わってきました。

第十一章 - 白鳥の歌

兵士はサリールを牢屋の門に案内し、一言も言わずに彼を囚人と残しました。カナヴォスは床に座って壁に鎖で繋がれていました。外見的には無傷のようでしたが、見失ったような目線からは、鞭や他の拷問具よりも残酷で非情な傷が表れていました。

「彼らによって輪姦されたんだろう？」 「それが事実だろう？悪党め、私を起こして彼女がこんなことをすることができるようにしたんだ」とカナヴォスは憎しみを込めて言いました。

「あなたは間違っています」とサリールは言い返しました。「私はカナヴォス。私たちは時間の輪廻に閉じ込められたキーを召喚するために必要な持ち主です。あなたがバルラーミに屈辱を与えられたのは私の計画とは関係ありません」

「キーを召喚するために？それはつまり、パラマス法王は...？」

「彼は死んでいます。今私、サリールが霊的な権威です。だから私の魔法であなたを目覚めさせることができました」

「...そうなのか」とカナヴォスは言いました。「もし私が彼女との取引を知っていたなら、私を辱めることを選んだのか、私はただの副次的な被害者なのか？」

サリールは視線を逸らしました。

「私にはわかりません。あなたの苦しみは、私や他の存在と同様に、この世界の涙の谷である痛みの海の一滴に過ぎません」と彼は言いました。

カナヴォスは目を細めました。

「一つの質問に対する答えが二つしかなく、そのうちの一つが不快であり、答えることを拒否すれば、ある意味で答えているというものです。他の人を犠牲にするのは容易ですね...」

「あなたは私を理解していません」とサリールは言いました。「私が答えることができるのは、私がどのように行動するだろうということです。それが起きてしまった以上、私はその選択をするだろうとしか言えません。私が単なる推測をして答えることしかできないことは、選択肢をしたことがないため、確実にわからないからです。推測で答えることを望むのですか？」

「哲学的なことを言うんですね」とカナヴォスは苦い声で笑いました。「あなたがホワイトマジックを使えるようになるということは、フランゴ人たちが考えるように、悪魔が神の暗黒面であるという信念が正しいのかもしれませんが」

「現実的に考えましょう」とサリールは止めました。「あなたの魂は慢性的な傷を負っていません。キーを召喚するために私の助けが必要であり、おそらくいつまでもその状態にはなれないでしょう。さらに、三ヶ月後にエレフスが戻ってきてあなたの体と魂を要求するでしょう。あなたには未来はありませんし、バルラーミのおかげで現在は死への悪夢です...」

カナヴォスは苦い笑いを浮かべました。

「自殺しても何の意味もありません。私はナフィルです。不妊の女性の腹から生まれた黒魔術で作られた人工的な人間です。私の体は悪魔の容器になる運命であり、私の魂はその魂に吸収される運命です。私は、生死を超えて地獄で燃え尽きることを知っています」

「悪魔は神によって創造された天使です。神の霊と共鳴し、もし悔い改めるなら神のもとに戻ることができます。バルラーミがあなたの魂を苦しめるために体だけを傷つけたのは、あなたの体だけが運命づけられており、魂が救われる可能性があるからです。信じることができないなら、創造主に対して信じることができるようになるような信仰が、暗黒を光に変えることができるということです。物質には何をもちたらずでしょうか？辱めと絶望しかありません」とサリールは言いました。

カナヴォスは黙ってしまいました。

「わかりました」と彼は最終的に言いました。「私に死をください」

「私の目を見て、アルコンテよ」とサリールは言いました。

カナヴォスは顔を上げ、サリールの緑灰色の氷の目に視線を合わせました。何かが彼の心の中で解き放たれるのを感じ、不安そうに動こうとしました。そして今回は成功しました。

カナヴォスは自分の手を見て驚きました。鎖が消えていました。

「これは...？ どうやってしたんですか？ 鎖はどうなったんですか？」と彼は尋ねました。

「鎖はあなたの心の中でしか存在していませんでした。それはバルラーミの呪文の一部でした。そして今は...」

サリールの手には豎琴が現れ、彼はそれをカナヴォスに差し出しました。

「これは力の言葉で、音符によって暗号化されています」と彼は説明しました。「死を望むという一心で心を空っぽにし、最後の音符と共にあなたの心臓の鼓動が止まるでしょう」

カナヴォスは優れた豎琴奏者であり、紙に書かれた内容を覚え、決意と落ち着きを持って演奏を始めました。彼の指が豎琴の弦上を素早く動き、この曲、その奥深い旋律は悲しみと苦しみの精華を音として表現していました。

ついに最後の音符が豎琴から逃げ出し、そこに留まりたくないかのように空中に浮かんでいました。そして数瞬後、ナフィルは息を引き取り、無力な体は石に変わりました。

「なぜカナヴォスを殺したのですか？」とバルラーミはサリールに問い詰めました。彼女はサリールの部屋の扉を開け放ち、怒りに満ちた声で話しました。サ支理はその調子で彼女の制御を失ってしまったことを感じていました。

サリールは床に座って瞑想していたが、半分笑顔を浮かべた。アズライルの暗い服を脱ぎ、白いイニシエートのチュニックを着ており、太陽のティアラが彼の頭に輝いていた。

「彼が協力できる状態になかったからです」とサリールは冷たく答えました。「キーを召喚するためにカナヴォスの協力が必要でしたが、彼がいつまで経ってもその状態になれなかったので、役に立たなくなりました。さらに、三ヶ月後にエレフスが戻ってくると、あなたの体と魂を要求します。あなたには未来がなく、バルラーミのせいで現在は死への悪夢です…」

「過小評価していたかもしれないわね」とバルラーミは言いましたが、徐々に落ち着いた声に戻りました。「さあ、サリール。私を真のアルコンテに変えてください」

サリールは立ち上がり、バルラーミの前に立ちました。

「頭を下げなさい」と彼は言いました。

バルラーミの目から怒りが溢れ出しました。

「戴冠式では私の霊的な権威に敬意を払うジェスチャーが必要です」とサリールは言いました。「それは単なる魅力的な自尊心を一時的に捨てることですから、馬鹿げた誇りは捨ててください」

バルラーミは嫌々ながらひざまずき、サリールは静かにバルラーミの頭から月の冠を取り、両手で空中に持ち上げながら次の秘儀の言葉を唱えました。

「私は空、あなたは大地。私は聖職、あなたは貴族。神聖なロジャによって与えられた霊的な権威により、私はあなたをルメリのアルコンテに任命します。月の冠を身に着ける者として。世俗の力が与えられますように。アミン」

サリールは月の冠をバルラーミの頭に戻し、イフティスの印を描き、立ち上がるようにバルラーミに合図しました。彼女が立ち上がると、新しいアルコンテは自分のマナがヒエロファントのマナと結ばれたことを感じました。

「素晴らしい」とサリールは言いました。「今夜、ダートの鏡の前でキーを召喚します」

「今夜ですか？なぜそんなに急いでいるのですか？水瓶座の時代の始まりまでまだ三ヶ月もあります」とバルラーミは言いました。

「あなたは間違っています」とサリールは答えました。「見えない寺院では時間が夢のように過ぎます。この夜にポータルを越えなければ、私たちの野望はくだらないものになります」

バルラーミは眉をひそめました。グロスが死んでいる今、三ヶ月間姿を消すと、フランゴ人たちは元のようになるでしょう。それは特に予想されるように、ルメリの人々が野蛮な征服者のくびから逃れようとする時に、無秩序につながるでしょう。

「なぜそんな些細なことに心を痛めるのですか？」とサリールは彼女の思考を読み取りました。「私たちが神となってイクミニに戻った後、競争や反乱は問題ではありません...

最終章 - 生ける亡霊

約束の時間に、バルラーミは儀式の準備を完了している魔術師の前に立った。彼はダートの鏡の前に立ち、シギルされた円、香り高い煙、ろうそくの光がカメラ全体に必要なマナを満たしていた。

ヒエロファントとアルコンテは息を合わせ、同じ声で話しました。

「ヴァウはシン：二重性の統一。へはMEM：幻想の中の現実。ヨドはアレフ：永遠の中の時間。私たちは、マギの星の光の下で、天国の鍵を呼び出します」

サリールの手には銀の光の鍵が、バルラーミの手には金の光の鍵が現れました。二人は一斉に、同じ精神に取り憑かれたように、霊的な鍵を二本の柱に挿し、逆方向に回しました。

鏡には天空が現れ、アクエリウスの星座が現れ、マギの星で飾られていました。サリールはバルラーミに手を差し出しました。

「上にあるように、下にも同じ」とサリールは言いました。「そこに、マギの星には見えない神殿があります。私と一緒に来てください...」

バルラーミは少し動揺しながら、若い魔術師の手を取りました。二人は一緒にダートの鏡を通り抜け、マギの星への魔法の道を旅しました。

見えない神殿は、ヴィザンティオンの神殿と同じ形とサイズでしたが、紫水晶の代わりに星の光を吸収し増幅するようなクリスタルで作られていました。ドームの下、水銀の池に植えられた、神の力の第五元素である啓示の木がそびえ立っていました。その幹と葉は乳白色で、果実は小さな金のりんごのようなものでした。

「ここで待っていてください、親愛なる人」とバルラーミは言いました。「一緒に食べるために果実を取ってきます」

アルコンテは木に向かって行き、果実を一つ摘んで食べました。彼女の唇は軽

蔑の表情で歪みました。彼女は神性を誰とも共有するつもりはありませんでした、特に浅はかな浮かれ者とは。

しばらくすると、バルラーミは炎に包まれ、苦痛の最後の叫び声と共に灰になりました。

サリールは薄く微笑みました。

「計画通り。絶対創造の光と魂の闇との接触から生まれる地獄の火が、啓示の実の汚れから守る炎の剣を形成します...チェックメイト、偉大なる遊女」

アルコンテの灰の上を無関心に踏みながら、サリールは別の実を摘み、食べました。それは地上のどんな美食よりも美味しく、彼の口の中で甘美な霊薬のように消えていきました。突然、若者の目の前に完璧な美しさの光が現れました：啓示の光、イズイスの光。

その後、光は消えました。

サリールは腰につけたアズライルの短剣を取り出し、刃の平らな部分に自分の姿を映しました。若者の髪は天使の髪のように銀色に変わり、彼の体が啓示の実のマナを吸収したことを示す明確な証拠でした。

サリールは壮大な計画の成功に喜びました。彼は手を空に掲げ、目を閉じ、神聖なトランス状態に入り、世界で最後に唱えられるべき呪文を唱えました。

「現れよ、イズイスよ、啓示の光の洪水として。創造は治癒不可能な病気であり、その唯一の希望は滅びです！私の魂は、その源から出て、永遠に眠りますように。マテリアの鎖から解放されまうように、イズイスよ、私はあなたを呼びます、エンソフォル、存在を消す無限の光よ！悪魔の王国が飲み込まれる... 光によって」

サリールはマナが自分から出て行くのを感じました。それは光輝く光の輪のように純粹で聖なるものでした...しかし、何も起こりませんでした。ビジョンもテレパシーのメ

ッセージもありません。トランスから目覚めたサリールは、何かがうまくいかなかったことを知りました。木も神殿も跡形もなく、ただ砂の海が広がっているだけでした。砂漠の真昼でありながら、太陽の光はくすんでおり、眩しさがないように感じました。サリールは熱も寒さも感じませんでした...何も感じませんでした。さらに、太陽の冠が彼の頭から消えて、単なる見習いの帽子に変わっていることに気づきました。

「...水瓶座の時代を防ぐことができなかった」-サリールは推測しました。「でも、なぜ？ 啓示の実のマナで形成された最後の審判を呼び出す呪文が、なぜ私をイクミニに戻してしまったのだろう？」

魔術師は不気味な微笑を浮かべました。

「終わりには、何も残らない。希望があるなら、それは神から来るでしょう。人間は運命に勝つことはできません。イクミニが永遠の闇の下で一つになるのは時間の問題だった...」

サリールはナイフを首に当て、喉を切ろうとしましたが、それは煙を切ろうとするようなものでした。彼の肉は血を一滴もこぼさずに刃を通しました。痛みさえ感じませんでした。

「いいや！」-彼は思いました。苦い涙が彼の頬を伝いました。「なぜ死ねないの？ なぜ私は死ぬことができないの？」

魔術師には謎を考える余裕がありませんでした。彼の目の前に、紫の衣装と白い翼、銀髪と黄金の瞳を持つ天使が具現化しました。星冠が彼の頭に載っており、サリールが今まで見た中で最も邪悪な目をしていました。その瞳からは、創造の闇全体が恐ろしい黒い光として放たれていました。

「この世の神、エレフス...」-サリールは推測しました。

「本当に運命に勝てると思っていたのか、アダマスの子よ？」-

エレフスは言いました。彼の声は非人間的に美しく、非人間的に邪悪でした。「君の陰謀は、私が許したからこそ実現したものです。啓示の実には純粋な心にもそのマナを与えることを私は知っていました。しかし、啓示の実にたどり着くために必要な罪を犯すことができるのは闇の心だけでした。君は不正なゲームをしていたのだよ」

「もし私の心が闇であったなら、炎の剣によって私は消えていたはずですよ。あなたの預言者のように」-サリールは反論しました。「啓示の実のマナを吸収できたことは、私の心に光があることを証明しています、たとえそれが薄暮の光であっても」

エレフスは嘲笑しました。

「君の体が燃え尽きなかったことが、啓示の実が君の魂を純粋だと認めたことを意味すると思っているのか？ 自分が何に立ち向かっているのか、わかっているのか？ -彼は尋ねました。「君が最も後悔しているのは、自分自身の存在だ。生ける亡霊として、イクミニを終わりの時までさまよいつける。君は死を求めるが、それを見つけることはできない。睡眠を望むが、それは君のもとには来ない。君は眠らず、サリール、休まない。君は叫び、だれも君の声を聞かない。人々は君をベールの向こうから見る（太陽のように見えるが、彼らは君を見ない）。もし君が今この運命をヴァルラーミと交換できるとしたら、それをするだろうか？」

若い魔術師は数秒間、数秒間の間、自分が数秒間苦痛に苦しむ必要があると思いました。それが死に至る唯一の方法であり、平和であり、自由であることを理解しました。エレフスが正しいことを悟ったのです。

「君の提案には論理がある」とサリールは冷静に言いました。「私は他の人々をチェスの駒のように操り、それによって多くの人々には私が悪人であり、神が啓示の実を通じて私に与えた罰であると考えられるでしょう...言ったように、論理的な考え方です。しかし」と彼は付け加えました。「それは法による論理です。私は霊的な人間として、真のイズィアンとして、エリウンは絶対的に愛に満ちた創造主であり、罪は罰せられるべき犯罪ではなく、癒されるべき病気であることを知っています。ヴァルラーミは治せない闇であり、夜のように暗い存在であったため、啓示の実を彼女から奪うことは最も慈悲深い行為でした。私は生ける亡霊、天使と人間の中間の存在になりましたが、私のような薄暮の魂は啓示の実のマナの一部しか吸収することができません...」

サリールは突然黙り、薄く微笑みました。

「...言ってごらん、エレフス」と彼は言いました。「なぜ私を苦しめないのか？」

悪魔は傲慢に微笑みました。

「君はすでに苦しんでいる、愚か者」と答えました。

「君の心には痛みを与えることができないからだし、それが君に刻まれることを妨げるのと同じ理由だ。私は物質に結びついていて、それに支配されてはいない。生ける亡霊としてイクミニに戻ることは贈り物なのだ、罰ではない」と彼は付け加えました。「今は時をかけて瞑想し、自分の魂の暗黒から癒されるための時間がある。何の生物や必要性も私の思索を邪魔することはない」

悪魔は軽蔑的に笑いました。

「お前は愚かだ。マーキングは魂を闇に封印する手段の一つに過ぎない。間違いなく最も優れているが、唯一のものではない。この時代以前から、運命によって罪に落ちた魂たちがいたことを知らないのか？」-彼は言いました。「そして、最後の審判、絶対創造の光による時空の

破壊さえ私を私の王冠から奪うことはできない。光の中で燃え尽きることは、私の心の闇を肥大化させるだけであり、私が墮落させたすべての存在の闇をも肥大化させる。これが私の無限の闇の王国であり、それによって私はエリウンとその無限の光の王国に似ている。そして、お前は逆説に陥っている。啓示の実に到達するために犯す必要があった罪を後悔する方法などないだろう？後悔できないとしても、それはお前の魂が癒されることを意味する。お前の魂は治せないのだ」

「書かれている：法は増し、恵みはいっそう増す」-サリールは反論しました。「後悔することはできなくても、後悔できないことを後悔するのはです。それが私が提供できるすべてですが、私はイズイスの目からそれが受け入れられると知っています。貧しい寡婦の二枚の銅貨と同様に。私には千年の瞑想が必要かもしれませんが、私の魂を癒すことができると分かっています。そして、それを成し遂げた後、私の召喚は神に届き、啓示の光が降りて私の望みを成就します：目の前で創造が消え去る間に息絶えるのです」

「夢を見続けてください...」-エレレフスは皮肉っぽく答えました。

その後、サリールは一人になりました。若者は薄く微笑みました。

「書かれている：悪魔に抵抗し、彼は逃げ去るであろう」

サリールは蓮華座の上に座り、イズイスのマントラに集中しました。それは内なる光を生み出す最大のものでした。若者の思考はまず呼吸と共鳴し、次に鼓動と共鳴し、彼を聖なる領域に引き上げる深いトランス状態に陥りました。トランスは彼の意識を神聖な領域にまで高め、悪魔の声が届かない領域にしました。

「イズイスよ、私は情け深い罪人です。イズイスよ、私は情け深い罪人です。イズイスよ、私は情け深い罪人です...」